ETERNAL　CHILDREN　～永遠の子供達～

ラサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＥＴＥＲＮＡＬ　ＣＨＩＬＤＲＥＮ　～永遠の子供達～

【Ｎコード】
Ｎ９７０９Ｚ

【作者名】
ラサ

【あらすじ】
遠い未来、人類のほとんどが滅びを迎えた中、日本で唯一生き残った人間達の物語。人類の滅亡を防ぐために科学者シイナは閉鎖された空間「ドーム」で特別な少女マナを育て上げた。しかし、マナはかつて実験体として処分したはずのアルビノの少年ユウによってさらわれてしまう。
人類の滅亡を受け入られないシイナの計画には、マナはどうしても必要だった。そして、マナをさらったユウにも、マナはどうしても必要だった…

逃げ場のない未来に取り残され、翻弄される人間達がたどり着く先は、希望か、それとも絶望か。

01（前書き）

内容はなんちゃってＳＦですが、少々ハードな展開や部分もあるので、お読みになる際は注意が必要です。

01

その部屋に、窓はなかった。

外部からの有害なものを全て遮断するよう作られたためである。空調の行き届いた完璧な空間に、換気としての役割を担う必要はなかった。

だが、観賞としての役割を補う代わりに、部屋の側面にはスクリーンパネルが窓を似せて張り巡らされ、外の景色を投影するようになっている。もちろん、好みの景色に切り変えることも可能である。

「綺麗ね――」

マナは無意識にそう呟いていた。

今彼女が見ているものは、そこに本当の窓が存在したならばそのままに映る、青い空だった。明るさを含んだ青に、はっきりとした大きな白い雲が形を変えながら流れていく。

このスクリーンから見る外界の景色を、マナはとても気に入っていた。それは、彼女の瞳がじかに見ることのない、決して触れることも感じることもないものだからだ。

マナの知っている世界は、この白い壁の中だけだ。彼女は太陽の光の下に立ったこともなければ、暗闇を照らす月光も、星の瞬きも見たことがない。草の間を抜けていく風に吹かれたこともなければ、柔らかな地面の感触も知らなかった。

識ることはあっても、感じることはない。

それがマナの全てだった。

「本当の風って、どんなものなのかしら。あんなに草を揺らして、もしそこにいたら、どんな感じがするのかしら」

最近、マナはよくそんな感慨に囚われる。この白い壁の向こうの、まだ本当に見たことのない世界へ出ていきたいと。

自分を育ててくれた優しいシイナは、外は人間の生きていけるところではないと教えてくれた。太陽が沈んで、一夜明ける前に、人

間は自然のもたらす暗闇の恐ろしさに耐え切れずに発狂しているのだと。実際にそれを試して、発狂して死んでしまった人間がいたということも記録に残っていると。

それを聞かされた時、幼いマナは泣いてしばらくは明かりを消して眠ることはできなかった。そして、太陽が沈んだ後の外の様子を見ることは、生まれてから十四年間、一度もなかった。

それでも、マナは外界に対する憧れを止めることはできなかった。スクリーンに映る外界の景色は穏やかな雰囲気を漂わせ、いつも以上に彼女の憧憬をかきたててやまない。

「――そうよ。太陽が沈むまでなら、いいんじゃないかしら。今度博士の機嫌がいい時に頼んでみよう」

マナがそんな風に心を飛ばしている間に、オートドアが開き、静かに部屋へ入ってきた人物がいた。

「マナ。もう時間よ。いらっしゃい」

自分の名を呼ぶ声に、マナは振り返った。

「博士」

マナを呼んだのは、二十代後半の美しい女性だ。マナの育ての親とも言える。色素の薄い髪は襟足にとどくほどで切られて、少々男性的な感を与えている。年齢よりは若く見えるその面差しは、些か感情に乏しく、冷ややかな美貌を際立たせていた。

対照的に、マナは腰までとどく黒髪を揺らして、少女らしいあどけない笑顔で、シイナのもとへとかけよる。大きな瞳が印象的に映るあどけない顔立ちは、無邪気さもそのまま表わしていた。

自分より大きなシイナを見上げるマナは、時には冷酷とさえ見えるその美貌が、自分に向けられるときは暖かく慈愛の深いものになるのを知っていた。透き通るような、感情に乏しい声も優しく響く。

マナは母親に対する愛情を知らないが、劣らぬ想いでシイナを愛していた。この閉ざされた世界に存在する数少ない人間の中で、唯一彼女だけが同性であったことも、その理由と言えよう。

「博士、今日は何か起こりそうな気がするの。とても、不思議なこ

と」

「まあ。マナには隠し事はできないわ。何でもお見通しなのね」

「どうしたの、博士。何かあったの？」

好奇心を隠さずに、マナはシイナの腕に絡みついた。

「そうね。〈学習〉が終わったら教えてあげるわ」

「何なの、博士。隠さないで教えて」

「それは見てのお楽しみよ。さあ。行きましょう」

二人は部屋を出て、大きく緩やかな弧を描く長い廊下を歩いた。

この科学技術の粋を懲らして造られた建造物――ソーラーパネルで外面を覆った半球のドーム――が、マナの世界の全てだった。

地下十階の更に奥の最下層に動力維持のための設備を据え、底部の中心点からは頂点へとエレベーター八台を据えている。

内部は、一階をホールと倉庫にして、二階から十階までをケーキを配分するように均等に四区域に分けており、管理、研究、居住、生産と、それぞれの機能別に各技術者によって統制されている。各区域は偶数階ごとに全ての区域と通じるようになってはいるが、それぞれの職種に応じて立入が厳しく規制されている。

今、マナとシイナがいるのは研究区域である。シイナはこの区域の責任者でもあった。

マナはこのドームの構造を知識として理解していたが、実際に彼女が知っているのは、研究と居住区域のごく一部分だけだった。

だが、マナにはそれが苦にはならない。それは知る必要のないことだからだ。

マナは選ばれた人間なのだ。だから、それ以外は何も重要なことではない。そう、教えられてきた。

今も彼女は、何も知らずにシイナに連れられて、居住区の自分の部屋から平行に移動し、研究区二階の学習部屋へと移動している。

研究区の三階から五階分までは存在しない。その空間は、床をぶちぬいて造った植物用の大きな温室となっており、エレベーターへ向かう直線の廊下側面は特殊コーティングを施したガラスが張り巡

らされていた。
マナとシイナが向かうその先で、長身の青年が、ガラスの向こうの実験用植物の温室を眺めている。
初めに彼に気づいたのは、マナだった。続いて、シイナも気づき、二人は立ち止まった。
「――」
マナはじっと彼を見つめた。見たことのない男性で、シイナと同じくらいの年代だということはわかった。視線に気づいたかのように青年は振り返る。しかし、そこには何の感情の揺らぎも見えない。
逞しい、または、男らしい、そんな形容を、青年は持ち合わせてはいなかった。すらりと痩せて、華奢なようにも見える、美しい、だがどこか退廃的な翳りを漂わせる青年だった。
「やあ、シイナ」
声をかけられたシイナは、無表情に青年を見ている。
「部屋で待つようにと伝えておいたわ。なぜ廊下に？」
「ああ。退屈だったからね。温室を見ていたんだ」
言いながら、初めて彼はマナに目を向けた。興味深げな眼差しで。
「君が、マナかい？」
「ええ」
「はじめまして。君の〈夫〉になるフジオミだ」
優しく微笑う長身のフジオミを、マナは驚いて見上げた。表情を見せると、途端に先程の退廃的な名残は消え失せ、人懐こい和らかな印象になる。
「まあ、あなたがあたしの〈旦那様〉なの。はじめまして、あなた。マナと呼んでください。お風呂になさいます？　それともお食事が先ですか？」
「は？」
突然の、わけのわからない発言に戸惑うフジオミに、マナの背後でシイナが噴きだした。
「どういう教育をしたんだい、君は」

「マナは今、歴史で『家族』について学んでいるのよ。古い創作書が教科ディスクなの。少し間違った概念を持っていても大目に見てあげて」
「――まあ、いいけれどね」
肩を竦めるフジオミに構わず、シイナはマナに視線を向けた。
「さあ、マナ。残念だけど、もう勉強の時間よ。行きなさい」
「でも博士。あたし、まだフジオミといたいわ。お話したいの」
「〈学習〉が終わったらいいわ。今日はそれで終わりよ。レストルームで待っているわ。いいわね」
「――はぁい」
膨れた顔をしながら、それでもマナは頷いた。こういうとき、シイナは決して譲らない。そして、約束を破ることも決してないのだ。
廊下を駆けて曲がり角まで来たとき、マナはそっと立ち止まり、振り返った。
「――」
シイナとフジオミは何か話をしているようだった。マナには気づいていない。もう一度、マナはじっとフジオミを見つめた。
「彼が、あたしの〈伴侶〉になる人なのね」
ほうっ、と、息をついてマナは笑った。
「すごく素敵。優しそうだし。よかった」
話には聞いていたのだ。〈夫〉となるフジオミのことは。
だが、マナはそれまで一度もフジオミに会ったことはなかった。否、シイナ以外の人間と、彼女は接触したことはこれまでになかった。シイナ以外ここにいるのは、みんなドームを維持するためにオリジナルである人間から複製された、クローン体ばかりなのだ。
初めて見る、自分と同じ立場の異性であるフジオミに、マナの興味は尽きない。
じっとシイナとフジオミを見ているマナに、しかし、彼らのほうが気づいた。
マナは驚いたように振り返ったシイナに手を振ると、予定された

今日の〈学習〉を終えるために学習室へと向かった。

「どういうつもり？」

マナがいたときとはがらりと変わった、突放すような口調。シイナは苛立たしさを隠さずにフジオミを振り返り、見据えた。

視線を受けとめるフジオミは、さほど気にしたふうもない。まるでなれっこだとでも言いたげに。

「まだマナの〈教育〉は済んでいないわ。計画が完全に終わってもいないし、あなたのことを事前に説明する間もなかった。あの子はこちらが驚くほど勘が良すぎるの。余計な刺激を与えられては困るのよ。一体どういうつもりなの！？」

強い口調に、フジオミは微笑した。

「いいのかい、マナが見てるよ」

シイナが振り返ると、慌てたように手を振り、すぐに少女は消えた。小さく舌打ちして、シイナはフジオミに向き直る。

「私の質問にまだ答えていないわよ」

「君は確かにこの計画の責任者だが、あくまでもそれは名目上にすぎないということさ。カタオカにも、僕を拘束することはできないしね」

カタオカとは彼等の議長で、現存する二つのドームを統括する、彼らの社会の実質的な指導者でもある。

だが、指導者は存在しても、独裁はなかった。完全な権利をもつ人間の数が少ないために、直接民主制なのだ。この社会での決定権を持つものは、クローンではない人間。彼等は全て議員となり、指導者の下、議会を召集し、決議する。議会の承認を得なければ、何も事が運ばないようになっている　それは、かつての彼等の世界にあった政策の名残だった。

だが、何事にも特権がある。フジオミもまた、特権を持つべき人間であった。

「しばらくはここにいる。部屋の用意はさせてあるから不都合はないよ」
「また勝手に話を通したのね！　私に何の断りもなく」
「じゃあ、許可を」
フジオミは言う。
「今、許可をくれ。君が許してくれれば、それですむ」
「――」
その口調は、拒否されることを全く念頭においていないようにも聞こえた。
フジオミはもう一度繰り返す。
「シイナ、許可を」
シイナは強く唇を噛んだ。
「――好きにすればいいわ。私よりあなたに決定する権利があるのだから」
「結構」
シイナの反応を楽しむように、フジオミは微笑った。彼に対する、憎悪に近い感情がわいたが、辛うじて、シイナはそれを表情に出さずにすんだ。
「なぜここへ来たの。あなたはこの計画に乗り気ではなかったはずよ」
きつい口調にフジオミは軽く肩を竦める。
「君に会いたかったからだと言ったら？」
シイナは表情を変えることもなく、じっとフジオミを見つめた。それ以外、何の反応もない。
あきらめて、フジオミは吐息をついた。冗談の通じないことはわかっているらしい。
「――正直なところ、考えが変わったのさ」
「考え？」
「ああ。食わず嫌いはやめることにするよ。相手を知らなきゃ、好きになりようもないだろ。なるべくなら、相手にもいやな思いはさ

せたくないしね」
　シイナは、侮蔑の感を隠さずに嗤った。
「あなたに、相手を思いやる気持ちがあるというの？　自分のことにしか興味がないくせに。あなたにとって重要なのは、自分の楽しみだけでしょうに」
　だが、シイナの言葉にも、フジオミは気にしたふうもなく頷いた。それが事実であることを、彼自身が認めていた。
「だからこそ、楽しめるよう努力するのさ。せめて自分が不快にならない程度にね」

02

永い歴史の中で、今、人という種が滅びを迎えようとしていた。

原因はわからなかった。ただ、徐々に人間から、生殖能力が奪われていった。それがどの種族にも平等に訪れたことは、大いなる運命であったのかもしれない。

半世紀ほど前に、人類のほとんどは地球上から消え去ったと推測される。最初に、陸続きであるユーラシア、アフリカ大陸に住む人間が死に絶えた。なぜか死は、感染するかのように広大な大陸にいる人々に襲いかかっていったのだ。

そうして、オーストラリア、アメリカ両大陸に住む人々も相次いで死に絶えた。

かつて『日本』と呼ばれた経済大国は、辛うじて現在までは生き長らえた。だが、彼らを絶滅から救ったのは、島国であったということだけが原因ではなかった。

人類の滅亡が戦争や災害ではなく、生殖能力の衰えによってもたらされると発表されてから、世界は恐慌状態に陥った。日本も例外ではない。それ以前からの著しい人口の激減により、日本人の総数は、全盛期の半数にも満たなかったという。それでも、他国からの移住や帰化を特例としてしか認めなかったこの国は、自らの滅びは己れの国だけで迎えることを選んだのだ。

彼等の社会を支える支柱となったのは学者達だった。生物学、遺伝子工学、人類学その他の専門的な知識を持つ者達が来たるべき時に備えて日本社会を根本から覆した。

いわゆる、〈鎖国〉状態に入ったのである。

科学技術の粋をこらしてドームという完全なる閉鎖空間を作り出し、外部からの接触をいっさい排除した。

その当時では、己れのことに手いっぱいだった他国は、どこもこの小さな島国に関心を持たなかった。もちろん国内での反対もあったが、元来己れの国以外を排除しがちな状況であっただけに、強行突破されてしまえば、人々は意外にすんなりとその対策を受け入れ始めていった。

ただ、前回と違うのはどの国との交渉も完全に断ったということだ。

その頃までには、彼らはあらゆる弊害を克服していた。

人口の減少に加えて、完全自給自足がなったこの小さな島国は、ただ自分達の血脈が永遠に生き続けることだけを考えればよかったのだ。

だが、いかなる高度な技術をもってしても、生命の領域を支配することはできなかった。

現在、この島に存在する人間は、登録上で二百人たらず。ただし、純粋な人間は、その四分の一にも満たない。そのほとんどは、クローニングによる複製体であった。そして、複製体のほとんどは、世代を重ねるごとに生殖能力をもたずに産まれるようになった。

クローンは、もはや人間とははっきりと区別されており、労働用として扱われている。

生殖能力を失いながら細々と続く人間が終わりを迎えていく一方で、彼らはクローニングによる技術を駆使して、彼らの社会を保ち続けた。その奇妙な形態こそが、彼らの未来をねじまげていくことも気づかぬまま。

ねじまげられた未来にかろうじて生き残る人間達。

それが幸か不幸かは、彼ら自身にさえ、すでにわからなくなっていた。

03

突然のエマージェンシー。

この時、〈学習〉を終えたマナを迎えて、フジオミとシイナは研究区のレストルームでコーヒーを飲みながら休息を取っていた。

初め、三人は驚いたものの、ちょっとしたミスだろうと深刻には考えなかった。

だが、一分を過ぎてもやまない警報に、徐々に彼等の内に奇妙な不安が沸き上がる。

「何が起こったんだ？」

「わからない。事故かもしれない。ここから動かないほうがいいわ。管理区域に通信しましょう」

シイナが、机上のコンソールで管理区域への通信を始める。数秒してスクリーンとは違う壁面の大きなモニターに、クローン体の職員の姿が現われる。

「何があったの？」

『侵入者です。何者かがラボの通風口から侵入しました』

その耳慣れない言葉に、マナが息をのみ、フジオミが問い返す。

「侵入者？　そんなものが、外から来たって言うのか。馬鹿なことを言わないでくれ」

何処かのんびりした問いにも、無理はなかった。自分達を取り巻くこの世界に、外敵がいようはずもない。彼らはそれを事実として知っていたのだ。

『ほ、本当なんです。そちらに向かっています。早急に退避してください』

「動物じゃないのか。ある程度知能があれば、通風口に入り込むこともある」

「生体反応を確認したの!?　監視モニターが捕えたものをこっちにまわしなさい、はやく!!」
苛立たしげにシイナが叫ぶ。
モニターが切り変わり、侵入者の姿を映しだした。
「!!」
その瞬間、モニターのディスプレイに大きな木製のテーブルが投げつけられた。同時にスクリーンの風景が消え、窓のない部屋は人工燈の明かりだけが浮き彫りになる。
「きゃあ!!」
マナの悲鳴。
モニターに気をとられていたシイナとフジオミが振り返る。
「――」
薄暗い視界の中、ぐったりとしたマナを抱きあげている者に、フジオミは愕然とした。それは、未だかつて彼が目にしたことのない、不思議な容姿だった。
抜けるような白い肌。銀糸のような髪。見据える瞳は薄闇でもそれとわかる、炎のような赤だった。マナと同じくらいの少年だ。声も出せずに、フジオミはその少年を凝視していた。
「ユウ!!」
シイナが叫んだ。
それがフジオミにさらなる驚愕を与える。今、シイナは少年の名前を呼んだ。彼女は彼を知っているのだ。
赤い瞳が鋭くシイナを睨んだ。だが、すぐに踵を返して部屋を出ていった。マナを抱いたまま。
「待ちなさい!!　マナをどうする気!!」
シイナが後を追う。フジオミが数秒遅れて続く。マナ一人を抱えているというのに、少年の速さは二人を凌いでいた。
「シイナ、君はあの子を知っているのか?　何だ、あの異様な姿は――」
シイナは彼を見ようともしない。ただ前だけを見つめていた。そ

の顔色は心なしか青ざめていた。
「実験体よ。まだ生きていたなんて――」
忌ま忌ましげな呟き。走りざまに、シイナは廊下に備え付けられた非常時用のエマージェンシーコールをメインコンピュータに送り込む。彼らの前後で、両脇の壁から出てきた扉が廊下を仕切っていく。
彼らの前の通路も仕切られていくが、シイナは手慣れた手つきで扉につけられたコンピュータパネルを操作し、前へ進む。
フジオミはシイナに従い、ユウと呼ばれた少年とマナを追うが、途中奇妙なことに気づく。
非常時には、通路を仕切る全ての扉とエレベータは自動的にロックされ、特別なコードでなければ開かないようになっている。だが、最初の扉以降、シイナが開けるより前に開かれた扉は、壊したふうもなく、真っすぐに非常階段へと向かっている。内部構造に詳しくなければ、こんなことはできない。
これは事実だ。
明らかにあの少年はここを熟知している。
シイナは少年を実験体だと言った。
(しかし、一体何のだ。なぜ、そんな少年が、よりにもよって〈外〉からやってきたんだ?)
このドームを離れては、我々人類は生きられないというのに。
そんな疑問が頭の中を駆け巡る。
普段はめったに使わない非常階段をかけおり、シイナとフジオミは一階を目指した。
一人で逃げるのとはわけが違う。少年はマナを連れている。出ていくとしたら、入ってきた通風口からは不可能だ。
そして、それ以前にシイナはよくわかっていた。
(これは報復だ。自分に対する)
だからこうして、追ってこいとでも言わんばかりに逃げている。
一階へ着くと、奇妙な騒めきに満ちていた。外へ通じる扉の前に

は、少年がいる。そして、作業員であるクローン達は、それを遠まきに見ているだけ。無理もない。誰もこんな事態を予想だにしていなかったのだから。

「マナに傷一つでもつけたら許さないわ！！」

シイナの叫びにも少年は無言だった。信じられないことに、ロックされたはずの扉を手も触れずに開け、外へ消えた。

「マナ！！」

シイナが開け放たれた扉へとかけよる。吹きつける風は一瞬奇妙な渦を描いたが、すぐに止まった。

「――」

そして整備された敷地の遥か彼方の草地にすら、シイナとフジオミは二人の姿を見つけることはできなかった。

「なんてことなの…マナがさらわれるなんて…」

04

ひっきりなしに届く不快な音が、覚醒とともに大きくなっていく。
それはマナにとっては、紙が散らばる音に聞こえた。たくさんの紙が、床に落ちていく音。心の何処かで、それは違うとも思っていたが、他に思い当る音を知らなかった。そんな音を聞きながら、マナはゆっくりと瞳を開けた。

「――」

始めに視界に映ったのは、薄暗い天井の壁だった。
光の明度も彩度も、マナが今まで見たことのないものだった。
まだ夢を見ているのかもしれない。そう、マナは感じた。何故、こんなに暗いのだろう。さっきまで、あんなにも明るかったのに。
二、三度瞬きをしても、マナに視界の光の加減は変わらなかった。
だが、背中にあたる、ベッドの感触が違う。
体に触れているシーツの感触も。
奇妙な違和感が、徐々にマナの意識を覚醒させていく。

（何かが違う）

五感の全てが、訴えかけていた。
マナは飛び起きた。
そして、視界にその少年を見いだして驚く。

「――」

見たこともない容姿だった。彼女が今までに見た人間やクローンは皆髪も瞳も黒かったのに。
だが、ここにいる少年は違う。銀の髪に赤い瞳。抜けるような白い肌を持っている。
「あなたは、誰　？」

「ユウ」
低い声で、少年は名を告げた。端正な容姿は、まだ少し、少年らしいあどけなさを残している。
「ここは、どこ？」
「ドームの外だ」
「え！？」
「ドームの外だ」
繰り返し、少年は言った。それでも、マナはその言葉が信じられなかった。
さっきまで自分はドームにいたのだ。それなのに、どうして。
マナの思いを察してか、少年は身体を預けていた壁面の布から身体を離し、それをざっと横に引いた。
布のかけられていた壁にはそのままガラスをはめこんである。
この剥出しの作りは、何世紀か前の物だと彼女は確信する。
そしてその向こうには、彼女のまだ見たことのない世界が拡がっていた。

「嘘……」

思わずベッドから立ち上がり、窓に駆け寄り、そのまま立ちすくむ。
薄闇よりも濃く影を落とす巨大な闇が見える。
それは全て前世紀の遺物だった。
かつては繁栄を極めただろう高く聳え断つ建造物は、今は見る影もなく廃れ、錆びれ、崩れかけている。今いるこの部屋も、それと同じ廃墟なのだろう。
宵の薄闇の中、聞いたことのない騒めきがひっきりなしに耳にこだまする。
窓の端に映る、外に蠢く巨大な影。
マナの恐怖はいよいよ高まる。

「いや…あたしを帰して。このままじゃ死んじゃう、ドームに帰して…」
「死ぬ？　あんた、病気なのか？」
訝しげにユウが問う。しゃがみこんだマナに、近づいてくる。
「いや、傍に来ないで…」
恐怖で、マナは混乱していた。
その眼差しを、少年は強ばったような青ざめた顔で見ていた。
「俺が恐いのか？　あんたたちとは違う姿だから、恐いのか？」
「――」
「でもこの姿は、俺が望んだものじゃない」
ユウは苦々しげに顔を歪めていたが、今のマナにはそんなことを思いやる余裕はなかった。
その時、一枚ドアの向こうで声がした。
ユウが振り返る。
マナはいよいよ身を竦める。
「ユウ、帰ってきたのかい」
「おじいちゃん」
ドアが片側だけ奇妙に斜めの角度で開いた。
部屋に入ってくる人物を見るなり、マナは悲鳴をあげた。
薄汚れた見慣れぬ型の長衣を身に纏い、長い杖を持った老人の姿は、マナの瞳には異様にしか見えなかった。髪は見事な白髪で、同じく白い髭が顔の下半分を覆い胸までとどいている。
「おやおや、嫌われてしまったようだの」
さほど気にしたふうもなく、老人は微笑った。微笑うとかすかに見える皺のある肌に、さらに深い皺が刻み込まれる。
だが、マナは顔を両手で覆ったまま震えている。
声を殺して泣いているようだった。
老人はその様子を眺め、それからユウに視線を向ける。
「ユウ、その子のお守りはおまえに任せることにしよう」
「おじいちゃん！！」

「私を当てにしていたのかい？　それは見当違いというものだよ。私は反対した。おまえは聞かなかった。おまえの行動は、おまえが責任をとりなさい。お休み」

ゆっくりと杖に体重を預け、老人はユウに背を向けて、来たときと同じに静かに部屋を出ていった。

ゆっくりと、ユウはマナを振り返った。

「マナ、泣くなよ。おじいちゃんは恐くない。優しい人だ。それに俺、あんたを殴ったりとか、そういうことしたりしないよ」

優しくかかる声。だが、マナは泣きじゃくったまま首を振り続ける。

「いや。いや。帰りたい。博士のところに、フジオミのところに帰りたい」

「マナ…」

自分にのびてきた手を気配で感じ、マナは心底怯え、身を竦ませた。両手で顔を隠し、少しでもこの恐怖から逃れる術を探した。

だが、震える身体は、やがて何の危害も与えられないことを訝しみ、恐る恐る顔をあげた。

ユウはそこから動かずに、じっとしていた。目が合うと、振り切るように視線を逸らす。

マナは、自分の反応に傷ついた顔をしたユウに、驚いた。

それは、高ぶっていた感情を落ち着かせるのに、十分だった。

涙が、いつのまにか止まった。

そのまましばらく、マナは少年を凝視し、少年は唇をきつく咬んだまま顔を背けていた。

彼は別に、危害を加える気ではないのだ。自分一人が恐がっているだけなのだ。そう理解すると、まだ少し恐怖は残ったが、心には余裕ができた。

ユウは動かない。

マナはゆっくりと立ち上がり、ユウのそばへと近づいた。

実際に行動することで確かめると、今度は疑問が浮かぶ。

なぜ彼は、自分をここへ連れてきたのか。

「…ユウ…？」

それでも、ユウはマナを見ようとはしなかった。

「俺はただ――」

ためらうような低いユウの声が、マナの心に素直に届いた。

「あんたと、話をしたかったんだ――」

「ユウ…」

ユウはとても淋しそうに見えた。

「ここには、あなたたちしかいないの？」

「ああ」

では、無理もない。あんな奇妙な人物と二人だけなんて、自分になら耐えられない。

ひとりよがりな解釈を、マナはした。そう考えると、彼女はユウが可哀相になった。

「ひとりだったの？」

「ああ」

「淋しかったの？」

「ああ――」

ゆっくりと、マナはユウへ手をのばした。

ユウは動かなかった。

少し安心して、マナはユウの手を優しく握った。

ユウは、奇妙な顔つきでマナを凝視している。

マナはまた少し不安になったが、笑って言った。

「手をつないでいると、あたたかでしょう？　具合が悪くなると、博士にこうしてもらったの。こうすると、淋しくないのよ」

促されて、ユウはマナの横に座った。手はつながれたままだ。

不思議なことに、触れた手から、波のように穏やかな感覚が伝わる。そんなことは、今までにはなかったが、それが逆に、マナを落

ち着かせた。
「あたし、まだ少しあなたが恐いの。だから優しくして。怒らないで。そうしてくれたら、あたし、あなたといても恐くなくなると思うの」
ユウは不思議そうな顔をしてマナを見つめた。
「――恐くなければ、俺といてくれるのか、マナ？」
「ええ」
「どうすれば、恐くない？」
真摯な眼差しを、ユウはマナに向けた。マナは少し戸惑った。
赤い瞳がじっとこちらを見つめている。見れば見るほど、ユウの容姿はマナには不思議なものに思える。
「――その瞳」
「え？」
「あなたの瞳で見ると、みんな赤く見えるのかしら？」
「――」
しばしの間をおいて、ユウは声をあげて笑った。その表情は歳相応にあどけなく、マナの恐怖心を残らず拭い去るには十分だった。
「ひ、ひどいわ。あたし、本気でそう思ったのに」
「じゃあ、マナの瞳は茶色いけど、みんな茶色に見えるのか？」
「ち、違うけど、でも、本当に、綺麗な赤だから――」
「綺麗？」
ユウは訝しげな表情でマナを見つめた。なぜそんなことを言うのかわからないといった表情だった。
「綺麗よ。濁ってない、本当に綺麗な赤。あたしも、こんな綺麗な色だったらよかったのに」
マナは顔を近づけて、じっとユウの瞳を覗き込んだ。
「ずっと昔には、もっとたくさんの人がいて、ここだけじゃない、海の向こうの別の大陸で生活していたんですって。その人達は、あたしとは違う種で、髪の色も瞳の色も違うの。金の髪や銀の髪、瞳の色は青や緑。あなたみたいな赤い瞳をしていた人も、きっといた

のね」
「マナは変わってる」
「変わってる？」
「誰も俺の髪や瞳のことは話さなかった」
「どうして？」
「俺がこの髪と瞳を嫌いだからさ」
「こんなに綺麗なのに？」
「そう面と向かって言ったのはマナだけだ。だからマナは変わってるのさ」
「綺麗なものは大好きよ。だから、ユウの髪も瞳も好きだわ」
膝の上に頭を預けて、マナはユウへ視線を向けた。
「どうしてかしら。さっきまで、あなたがとても恐かったの。でも、今は違う。何だか、初めて会った気がしないの。懐かしいような気が、するの。変ね。本当に、初めて会ったばかりなのに…」
話し疲れたのか、いつのまにかマナは微睡み始めていた。睡魔にまけて、目蓋が閉じられた。
「マナ？」
ユウはそっと名前を呼んだ。だが、返事はない。ユウはマナの顔を覗き込んだ。まだ幼い少女の寝顔に、ユウは苦痛に耐えるかのような表情を向けていた。
「――」
そうして、朝が来るまであどけない寝顔を見つめていた。

外が明るくなっていくのに気づくと、ユウはマナを起こさないように静かに抱き上げ、ベッドへと横たえた。そうして、そっと部屋を出た。
階段を下り、すぐの部屋をノックする。
返事はないが、ユウはドアを開けた。中に入ると開いたままのカーテンから差し込む光で、すでに部屋は明るかった。

老人はベッドにはいなかった。窓に斜めに背を向けた揺り椅子に腰を下ろしていた。
ユウは黙ってそちらの方へと向かった。
目を閉じていても老人が起きていることに、気づいていた。
明けてゆく薄紫の中で、揺り椅子の軋む音だけが静かに響く。明るく照らされた老人の顔に、まだそう濃くならない影が優しく落ちた。
「おじいちゃん――」
「気がすんだかね」
ゆっくりと老人は目を開け、ユウに手を差し伸べた。
ユウは黙ってその手をとる。
「ごめん、おじいちゃん。俺、悪いことをしたよ」
「誰に対して、悪いと思っているんだね？」
「――」
「ユウ、あの娘はおまえの望むものにはなれんよ。それを、忘れんようにな」
「わかってる――」
ユウは静かにその場に座り込んだ。
失われたものを求めるのがどんなに愚かなことか、ユウはすでに知っていた。
「でも、おじいちゃん。マナは、俺の手を優しく握ってくれたよ。朝になるまで、そうしていてくれた」
「――」
「おじいちゃんと同じに、あたたかな、手をしてた……」
ずっと、欲しいものがあったのだ。ずっとずっと、それだけが欲しくて。
「ちゃんとわかってるよ。子供じゃないもの。俺だってもう、わかってるんだ」
瞳を閉じて、ユウはそれきり動かなかった。老人は優しく、ユウの髪を撫でていた。

05

マナが目を覚ましたのは、太陽が顔を出してからだった。
いつのまにかベッドに横たえられていたことに気づき、起き上がるとまず窓へと向かう。
青い空に浮かぶ雲は、流れるように動いていく。
初めて迎える朝の明るさと、熱、光の強さは、皮膚に心地よい刺激を与えてくれた。
崩れた廃墟の群れから顔を出す巨大な樹木は濃い緑を風に揺らめかせていた。
「昨日の音は、これだったのね――」
木々の騒めきも、昨日と違って優しく耳に届いた。
地は足の長い草が一面覆い尽くし、風の方向を指し示し、靡いていた。
風に揺れるたびに微妙に色を変える緑達。

「ああ　なんて綺麗なのかしら…」

これまでになく、マナは眼に見える美しさというものを実感した。
直に見る自然の景色に、これほどまでに感じるものがあるのだということも、彼女は知らなかったのだ。
もっと身近に、見て、感じてみたい。
思ってしまえば、後は簡単だった。
やり方もわからない鍵も、試行錯誤で解いて窓を開ける。
一斉に風がマナの長い髪を後ろへと靡かせた。
「きゃ――」
その勢いに、思わず瞳を閉じる。
眼に見えない何かがぶつかってくるような、そんな突然の感覚だ

った。
強いだけの感覚は、やがて身を包むように穏やかで優しいものへと変わる。
マナは自分の髪が緩やかに背中に触れては離れるのを確認して、瞳を開けた。
剥出しの手が、風にさらされている。
開いた指の隙間を、風が抜けていく。
ただそれだけのことが、マナにとっては風に触れているという重大な現実だった。
風を感じていることも、全てが夢のようでいて、けれども確かな現実なのだ。
こうしてここに立っていると、昨日までの自分のいたあの銀色のドームがいかにもつくりもののめいた絵空事のようにも思える。
それほど、マナのこの体験は深い衝撃を彼女に与えたのだ。
「なんて綺麗なの。こんな世界が、あったなんて……」
チチチと、木々のざわめきの間から聞こえる音。
マナはどこかで聞いたことがあると思った。どこでだっただろう。
ばさばさと、梢の間から飛び出したものを見て、マナは納得した。
「〈鳥〉ね！　鳥のさえずりだわ！！」
以前学習した教科ディスクの中にあった映像を思い出していた。
種類はもう覚えていないが、小さな可愛らしい鳴き声は、記憶の隅に残っていたのだ。
「なんていう鳥なのかしら」
聞いてみようと思って、そこで、はたとマナは気づいた。
ユウがいない。
周囲を見回すと、奥のドアは開きっぱなしになっていた。
顔を出して覗いてみると、そこは長い廊下だった。
廊下の両脇の壁には、今マナがいる部屋と同じ造りのドアが等間隔に備え付けられていた。
「ユウ……」

呼んでみたが、返事はない。
左側に視線を向けると、階下へと通じる階段の手摺りに気づいた。
たくさんのドアをあけてユウを探すより、まず下へ降りてみようとマナは考えた。
マナは知らなかったが、この廃墟はかつては多くの人間が宿泊する場所として使われていたのだ。その階だけでも部屋数は多くあった。
階下へ降りてみると、造りが変わっていた。外へ通じる、これまたガラス張りの入り口がある。広い空間だが、四方にどこへ続いているのかわからない細い通路がたくさんある。階下へと通じる階段のすぐ隣の部屋の扉だけが開いていることに気づき、マナはそっと覗き込んだ。
ユウと老人がいる。
老人は木でできた椅子に座っていた。
その膝に頭を持たせて、ユウは動かなかった。
初めて見たときは驚いたが、もう老人の姿に怯えることはなかった。
どうしてあんなに怯えたのか、今は不思議なくらいだ。
「――」
何だかひどく、その光景はあたたかくて、なぜかマナには声がかけられなかった。どうしようかと考えてしばし過ぎた時、
「マナ？」
不意に、ユウが気づいた。
マナのほうが驚く。
互いの視線が相手を認め、ユウは慌てたように老人から離れた。
「あの、あたし、目が覚めたら誰もいないから」
ユウはマナに声もかけずに部屋を出る。
走るように細い通路の一つへと消えていく。
「マナ、入っておいで」
揺り椅子に座ったまま、老人は声をかけた。

「ユウは朝食の支度をしに行ったんだよ。それまで、私の相手をしておくれ。おまえさんに話があったんだよ」
マナは言われたとおり部屋へと入った。
老人の傍のベッドの上に座る。
「あの、昨日はごめんなさい。あたし、驚いてしまって、それで」
老人は首を軽く振って微笑んだ。
「いいんだよ。人間は、未知なるものを恐れるようにできている生き物だ。知った上でどう判断するかが問題なのだよ」
マナは、その穏やかな老人の態度に安堵した。
そうなったら、今度は好奇心を押さえ切れなくなった。
「ユウとあなたは、どうしてこんな廃墟に住んでいられるの？　ここは古い時代に造られたものでしょう？　管理システムのない不便な建造物だとディスクで見たのに」
「ドームでしか生きられないと、教えられたのかね？」
マナは素直に頷く。
「だが、私達は生きている。人から教えられることも大事だが、自分で実際に確かめ、知ることもとても大事なことだ。おまえさんは私達とともに一晩この廃墟で過ごし、何事もなくこうしてここにいる。それが、おまえさんの判断すべき事実なのだよ」

事実。

その何度も使い古された言葉は、老人の唇から語られると、ひどく重要な響きを持っているように感じられた。
「私達は登録を抹殺された人間なんだよ。もうどれぐらい前なのかもわからないが、我々の何十代か前の祖先が、ドームを離れて外の世界で生きることを選んだ。わずかな機器と、食料となるだろう種子を持ってな。当時の生活は困難を極めたと聞くよ。無理もない。それまでの人々は、全てを機械に頼って生きていたのだから。挫折して戻っていった者もいたという。だが、残った人々はこの世界と

バランスよく共存することを学び、そうして私達の代まで続いてきたのだ」

「信じられない。そんなことが、可能なの…」

「マナ、おまえさんは、今までドームの中の世界しか知らなかっただろうが、もっとずっと、それこそ気が遠くなるほど遥かな昔には、我々はこの空の下で自由に生きていたのだよ」

「――」

「昔の人間にできたことが、今の我々にできないと思うのかね。身体的に、退化したわけでもない。退化したのは、精神の面においてなのだよ」

深い、心に染み透るような声を、マナは聞きもらさないようじっと耳を傾けていた。

「どんなに時が過ぎようとも、世界はいつでも我々に優しい。それを先に切り捨てたのは、我々の方なのだ」

老人は、大きな窓から見える、足早に影を落としては去っていく雲を、瞳を細めて見送った。

その顔は、この景色を愛おしむ想いに溢れていた。

「外の景色を見て、美しいと思わんかね。この世界は、美しい光と色に満ちている。どの時代より、きっと今、世界は一番美しいだろうと私は思っている。

この廃墟が、かつてはこの地の至る所に立ち並んでいた時代、大気は汚れ、水は淀み、地は腐り、木々は死んでいた。

だが今、大気は澄み、水は潤い、地は清らかに、木々は優しく歌う。

連鎖という言葉を知っているかね。全ては循環するのだよ。植物も、動物も、もちろん人間も、全てが等しく地上をめぐる生命の環の中にあった。

だが、人間はいつからかその環の中から外れてしまった。この時代の中で、今は人間だけが異質なのだ。我々がこのような時代を迎えたのも、当然のことなのかもしれん…」

「――」

マナは正直、老人の言うことを全て理解できたわけではなかった。ただ、熱心に聞き入っていたそのわけは、老人の言葉が今までマナの学んだどれにも当てはまらなかったからだ。

抽象的な概念と証明のない思想。

マナはそのことにとても興味を覚えた。

物思いにふけるマナに穏やかな視線を向け、老人は言葉を繋ぐ。

「ユウを、許してやっておくれ。あの子はまだ子供だ。我々が大事に大事に甘やかして育ててしまった。優しい子だが、とても淋しがりなのだ」

「あなたが、いたのに？」

「私がいてもだよ。あの子にとって必要なのは、決して手に入らないものだ。それ以外の何を与えても、あの子は決して満たされないのだ」

「ユウの欲しいものって？」

「決して会えないもの。決して許されないもの。決して愛せないもの。あの子が望んでいるものは、そういったものだ。あの子自身がそれを一番よく理解している。だから、淋しいのだ。

そして今、ユウはおまえさんの中に、手に入らなかったものを重ねている。だが、おまえさんはそれにはなれない。おまえさんはいずれ戻る子だからな。すまんが、それまでは私達と一緒にいておくれ。ユウも落ち着けばおまえさんを返す気になるだろう」

「いいわ。あたし、ここが何処かもわからないの。ひとりでは帰れないわ。きっともう少ししたら、博士が来てくれるかもしれないし、それまでは一緒にいてもいいわ」

「ありがとう、マナ。おまえさんは優しい子だね。では食堂へ行こうか。きっとユウが朝食を作ってくれているはずだ」

老人が杖を支えに椅子から立ち上がり、ドアに向かってゆっくりと歩きだす。マナはその後ろ姿に、無意識のうちに呼び掛けていた。

「おじいちゃん」

呼んでから、マナは狼狽えた。

呼んでみたかったのだ。

ユウが老人をそう呼ぶのが、とてもあたたかく、優しい感じがしたから。

振り返った老人は、そんなマナの動揺を気にしたふうもなく、次の言葉を待っている。

「そう、呼んでもいい…？」

ためらいがちにかかる声に、老人は穏やかに微笑う。

「ああ。いいとも。さあ、食事にしよう」

06

「シイナ。連絡は受けている。詳しい状況を説明してくれたまえ」
シイナがその部屋に入るなり、重みのある穏やかな声がかかる。
「説明なら、後でいやというほどご報告します。それよりもカタオカ、すぐに捜索隊を編成してください。一刻も早く、マナを取り戻さなければ」
カタオカは、椅子に腰掛けたままシイナを見つめていた。五十代の貫禄を備えたこの男は、シイナの焦燥とは裏腹に、落ち着いていた。
「待ちたまえ。そんな大がかりなことを私一人で決めるわけにはいかない。議会を召集しよう。議員にすぐ集まるように言う。二日待ってくれ」
「二日っ!?　あなたにはことの重要さがわかっていないのですか!?　さらわれたのは、マナなんですよ!?　彼女は、我々人間に残された唯一の女性なんです。彼女を失えば、私達は滅びるだけだというのに、なぜそう悠長に構えているんです」
「無駄に焦ってもよい結果は生まない。マナはさらわれたのだろう？　ならば生命の危険は、今のところはないのではないかね。マナの命が目的なら、彼が侵入した時点で実行されているだろう」
「だからといって、この先もマナに危害を加えることがないと、言い切れますか。我々人間は外界の苛酷な環境に耐えられるほど強くはない。マナもそうです。急激な環境の変化に、マナが耐えられるのかもわかりません。一刻も早く救出しないと」
「だが、捜索を開始しようにも、行き先に、見当はあるのかね。外は広い。捜索は日数もかかるだろう」
「指揮なら私がとります」
「いや、それはいかん。君にはドーム内を統括する役目がある。こ

ここには、君は必要不可欠なのだ」

「――」

悔しいことに、それは事実だった。研究区域の統率だけではなく、シイナは事実上このドームを統率していた。もともとの統率はカタオカが行なっていたのだが、数年前から彼はこのドームの全権を彼女に委ねていたのだ。

「では、今すぐに議会の召集を。急げば明日の朝には議会を開けるはずです。

あなたは我々の議長です。数少なくとも権限はおありのはずです。今すぐ行使してください」

言い捨てると、もう用はないといわんばかりの態度で、シイナは部屋を出、足早に進んだ。苛立たしさが足取りをも急がせる。

「議会は召集されることに？」

前方からかかる声。

視線を向けると、フジオミが自室扉のすぐ脇の壁に背を預けて立っていた。

「あなたはまた出席しないつもりなの」

「僕には、あえて発言すべきことはないよ。例え時間がかかろうとも、君の望みは通るだろう。そのためだけの議会だ。僕が出る必要はない」

言いように、シイナは苛立った。自分の行動を揶揄しているようにも聞こえる口調を、彼女は昔から大嫌いだった。

この世界で一番嫌いな男。

なぜこんな男がいるのだろう。

自分がどれだけの義務を背負っているのか、真に理解してもいない。

ただ己れの快楽のためのみに生きている。
一番腹立たしいのは、そんな男でも、この世界で一番必要だという事実だ。
唇を強く噛んで動かないシイナを、フジオミは訝しげに見つめた。
「疲れているようだね。そんなに気を張りつめていると君のほうがまいってしまうよ」
「あなたは何とも思わないの!?　さらわれたのは、あなたの〈伴侶〉なのよ!!」
見当外れな配慮に、シイナは堪え切れずに叫んだ。
しかし、思いもかけないシイナの怒りに、フジオミは一瞬戸惑いはしたものの、すぐに納得したように肩を竦める。
「愛しいと思うほどには、まだ愛していないからね」
そんな飄々とした彼の態度が、シイナにはますます腹立たしかった。
「あなたといると苛々する」
言い捨て、その場を去ろうとするシイナを、フジオミは興味深げに眺めていた。まるで玩具の動きを楽しむかの如く。
ややあって、シイナの背後に声がかかる。
「じゃあ、僕の性欲の処理は？」
立ち止まるシイナ。ゆっくりと振り返る。
「マナがまだなら、君が当然相手をしてくれるんだろう？　君の義務だ」
「今がどういう状況かわかってるの!?　あなたは――」
「僕は正直な質でね。嘘はつけない」
悪怯れずに言うフジオミ。
シイナは叫びだしかけたが、結局それをやめた。あきらめたようにフジオミの脇を通り抜け、彼の部屋に入ると、乱暴に白衣を脱いだ。
「そこまでにしておいてくれよ。僕の楽しみがなくなる」
フジオミの楽しげな声に、シイナは激しい嫌悪を覚えたが、黙っ

て彼が近づいて来るのを許した。
「半月ぶりだけど、君は、誰かと寝た？」
「くだらないことを。ここの職員はクローンよ。あなたのように性欲があるわけないわ」
「それは結構」
フジオミは慣れた手つきでシイナの身につけているものを剥いでいく。
シイナは彼とのセックスが何よりも嫌いだった。
所詮無駄な行為だとわかっているのに、なぜこの男の欲望はつきないのだろう。
遥か昔、人類は性交を繁殖のためではなく己れの快楽のために行なっていたという。
人間だけが、繁殖期を持たずに欲望を脳でコントロールする。それは人類の始祖が直立歩行を始めた進化の過程からだという。
そしてその時から、人類は地上を支配する征服者としてあらゆる生物の上に立った。
地上を支配し、その繁栄を極め、もてあましていた人類は、もはや繁殖のための性交を必要としなくなっていたのだろうか。
自然界では、繁殖のための伴侶を選ぶ権利があるのは雌だ。けれど、人間は違う。人間は何においても雄――男が権利を優先している。同じ動物でありながらのこの違いは、一体何に起因するのだろう。
答えは簡単だ。シイナは思う。
人間は――特に男は、繁殖を重要視しないのだ。だからこそ他の動物と違い、女を軽んじ、奴隷のように扱い、力づくで従わせ、己れの快楽のためのみの性交を続ける。
やがて人間からは生殖能力が奪われた。
それと同時に性欲も奪われた。一握りの特別な人間を残して。
自然に反した形態が、今日のような結果を齎らしたのだとすれば、男性優位の人間社会が滅びの一端を担っているのだと言っても、あ

ながち嘘ではないのかもしれない。
しかし、繁殖という自然界の掟に反して行なわれる性交の結果がこれだとすれば、人類はなんという重い代償を支払ったのだろうか。
「何を考えてるんだい」
耳元にささやく声に、シイナは思考を中断される。
フジオミもまた、今までの男達と同じに愚かな行為を繰り返している。
それなのに、やはり彼は選ばれた者なのだ。彼の中には昔のままの血が流れている。強い欲望と、命への渇望と、未来への希望が。
それだけは、認めざるをえない。
「何も――」
ベッドに押し倒されて、唇が重なる。愛撫する手に、じっとシイナは耐えた。早くこの行為が終わってくれることを。
「――」
フジオミの手は、身体の奥の、忘れ果てていた記憶を甦らせる。
それが、いやだった。
シイナには、もともと性欲はなかった。
フジオミの相手をするようになってからも、自分の内に性的な欲望が芽生えることはなかった。
それ自体に、嫌悪さえ感じていた。
だが、フジオミは違った。
彼は正常な男性だったし、性欲を処理する相手が必要だった。
生殖能力のあるものは同性との性交は禁じられていたので、必然的にシイナが相手にならざるをえなかった。
彼女はすでに自分に生殖能力がないことを知っていた。
生殖のない行為は無駄だと彼女は議会で述べたが、却下された。
それは彼女に与えられた義務であると。
そうして、シイナはフジオミに抱かれた。

初めてフジオミと寝た時のことを、シイナはまだ覚えている。
二人とも、十四歳だった。
シイナにとってそれは恐怖以外のなにものでもなかった。
身体を愛撫される嫌悪と、貫かれる苦痛に、彼女は泣き叫んで解放を求めた。
だが、フジオミは己れの欲望を満たすまで、決して彼女を解放しようとはしなかった。
そして、彼女は悟ったのだ。

生殖能力のない、けれど女性体である自分はただ、この男の性欲の処理として扱われるだけなのだと。

その事実は、彼女の誇りを踏み躙った。
全てにおいて他より抜きんでていた彼女であったが、子供が産めないということだけで、自分の意にそまぬことを強制され、従い続けなければならないのだ。
それは、隷属以外のなにものでもない。
決して対等の人間として扱われることのない怒りが沸き上がる。
彼女は己が身を呪い、疎んだ。
だが、それ以降何度フジオミに抱かれても、彼女はただ従順に従った。
決して泣き叫ぶことはしなかった。
それこそが、彼女に許された唯一の自尊心であったのだ。

シイナにとって苦痛としか言えない行為が終わり、彼女はすぐに衣服を身につけた。
部屋を出ていこうとするシイナに、背後からフジオミが声をかけた。
「質問を、いいかい？」

シイナが振り返る。
「手短にして」
その場で聞くつもりだ。
「ユウという少年のあの姿は何だ？　見たこともない容姿だった。奇形か？」
「遺伝病よ。言ったでしょう、ユウは実験体なのよ。失敗した、出来損ない」
「人体実験をしたのか」
かすかに非難めいたフジオミの口調にも、シイナは動じない。
人体実験は、過去幾度となく繰り返されてきたことだ。
それなくして医学の発達などありえなかった。
それが事実だ。
シイナは他人が向ける無言の非難を今まで幾度となく感じていたが、特別な感傷はなかった。あるのは、偽善めいた他者の感傷に対する侮蔑だけだ。
実験対象が、動物から人間に変わっただけだ。
同じ命を扱うことに変わりはない。
むしろ彼女にとっては、人間よりは動物の方が、よっぽど守るべき価値があると考えられる。
同じ動物でありながら、人間は駄目だという考えは、偽善以外のなにものでもない。
非難されるべき理由がどこにある、この退廃した世界で。
シイナはかすかに笑んだ。
「ユカは完全な女性体でありながら、子供を産むことはほとんどできなかった。妊娠しても流産や死産で、もう正常な子供は望めないこともわかっていた。だから、あれは最後の実験だったのよ」
もう十年以上前のことだ。
ユカなら、フジオミも憶えていた。
今の自分達より少し年上の美しい女性だった。会うたびに優しく笑いかけてくれた。厳しいことも言ってくれた。それはフジオミの

決して理解することのできない母性を、垣間見せるかすかなぬくもりだった。

フジオミの母は出産の後、我が子に乳を与えることもなく亡くなっている。父もとうになく、彼は物心ついたときから一人だったのだ。

そういえば、最後に見たあのときも、ユカは身篭もっていた。

事実上純粋なサカキの血脈は、ユカと彼女の兄であるマサトで絶えていた。

彼等の両親はいとこ同士だった。

マサトは時期が合わず、伴侶を迎えることなく死んだ。

ユカも最後の出産の後、三年ほど経って事故で死んだ。

だが、それでもフジオミの憶えているかぎり、ユカは幸せそうだった。

目立ってきたお腹を擦る仕草は美しかった。

ふと、彼の内に疑問がわきあがる。

そんな彼女が、我が子を実験に使ってくれなどというものだろうか。

「ユカは、彼女は承諾したのか」

「ええ。むしろ彼女が進んで志願したのだそうよ。この実験の成果が次代の研究に役立つようにとね」

「まさか、同じサカキの、マサトの凍結精子を――」

「そう。ユカの最後の人工受精は近親者のものを使ったの。皮肉だわ。他のどの正常な精子を使っても駄目だったのよ。それなのに、近親者の、実の兄の子供だけが、産まれてきた。もちろん、事前に遺伝子操作はしたわ。

でも、こんなに著しい結果がでるなんてね。先天性の遺伝病。しかも、生殖能力もないなんて」

ユカとマサトは極めて正常な強い遺伝子を保有するサカキという家系の子孫だ。シイナとフジオミという家系も、ここの血を少なからずひいている。確かに実験にこれほど最適なものもない。

繰り返された他との交配によってそれぞれ血こそは薄れたが極めて近いものである。

薄められては重ねられる婚姻も原因して、ほとんどの血筋は絶えてしまった。

出生率と平均寿命の低下。

年老いぬ内に、人々は死を迎える。

結果として、サカキの家系はユウを残して絶えたことになる。

フジオミの家系は正常な彼だけを残して絶えた。

そしてシイナの家系も絶えた。染色体性半陰陽という不妊の彼女を残して。

その家系の血を継ぐ人間がひとりしか存在しないことによって、彼等は彼等の姓を受け継いだ。すでに名前に意味はなく、血筋をたどる証として。

「待ってくれ。君はユカの最後の子供は、ユウだと言ったな?」

「そうよ」

「じゃあ、マナは、彼女は一体何なんだ?

僕はずっと、マナがユカの最後の子供なんだと思っていた。だが、彼女は〈サカキ〉じゃない。ユウにそれを継ぐ資格はないのはわかっている。登録を抹消されたんだからね。だが、マナは正常なはずだ。あの二人は双子ではないのか?」

シイナは首を横に振る。

「マナは今十四よ」

「ユウは」

「十六」

淀みなく答えるシイナに、フジオミの違和感はつのる。

「待ってくれ、年齢が合わない。マナとユウは双子の兄妹でさえありえない。マナはサカキではないのか?」

「いいえ。マナもサカキよ。ただし、ユウがいてもいなくても、マナはサカキの名を継げない。あの子の子供が継げても、マナ自身には、その資格はないのよ」

「――じゃあ一体、マナは何だ？」
「わからないのも無理ないわね。あなたもマナのことは知らなかったもの」
そう、それこそが自分の計画だった。
どんな些細な失敗も許されない、滅びかけた人類を救うべき、長い年月を要する計画。
「マナは――」
恐ろしい告白がフジオミの耳に届いた。

07

マナがユウ達と暮らし始めてから、すでに四日が経っていた。
マナは彼らの生活に驚きながらも、素直にそれを受け入れた。もともと、彼女にとって生活というのは与えられたものを享受することが大前提にあったので、それがドームにいてもここにいても大差はなかったのである。
マナの日課は、ほとんど決まっていた。
朝起きて朝食を終えると、老人とともに散歩をしながら色々な話をする。その後昼食をとり、今度はユウと廃墟や周囲の景色を散策する。そうして夕食をとり、シャワーを浴び、寝る。もちろん、絶えず彼らと一緒にいるわけではない。特にユウはすることがたくさんあるので、散策の最後には、マナはいつも一人にされる。
ここでの生活は、全てユウにかかっているのだから、マナとしても別段文句もない。
ただ一つ、気になることと言えば、朝食を終えて、マナが老人と話をしている時、ユウの姿がどこにも見えないということだけだった。
そして、どんなところでも案内してくれる彼らが、決してマナを近寄らせない場所が一つだけあった。それは、彼らの住んでいる廃墟の、地下へ通じる扉の奥だった。
マナは、ユウが午前中はそこにいるのかもしれないと思ったが、口には出さずにいた。その間、穏やかな時間が流れていたようにも思えるが、それは表面だけのことだった。
あまりにも違いすぎる環境で育ったマナとユウにとって、衝突は必然のことだったのである。
そしてそれは、ほんの些細なことだった。
後になってから、マナも、怒ったユウ自身にも何が原因だったの

か思い出せないほど、そんな些細な。

「何でもいいわ。ユウが決めて」

いつもどおりにそう言ったマナに、ユウは苛立たしげな表情を見せた。

「ユウ？」

「馬鹿じゃないのか、あんた！！」

突然声を荒げたユウに、マナは身を強ばらせた。

「自分のことだろ？　自分が決めろよ、そんなこともできないのか！？」

二人の会話を、少し離れて聞いていた老人が、間に入る。

「これこれ、ユウ。そんなに声を高くして言うこともないだろう。見なさい、マナが怯えている」

「だって、おじいちゃん」

「マナにはマナの、ドームでの生き方があったんだよ。それを理解しておあげ。自分の望みばかりを押しつけるのもいい方法とは言えんよ」

宥めるようにユウの肩をたたいて、老人はマナを振り返った。潤んだ瞳はじっと床を見つめていた。

「さあ。マナもそんなに恐がらなくてもいいんだよ」

マナは近づく老人の身体にしがみついてしゃくりあげた。老人はしばらくその背中を優しく撫でていたが、その後マナの身体を優しく離し、目線を合わせるように屈み込んだ。

「マナ、おまえさんも急に怒られたんでびっくりしたんだろう？」

泣きながらも、マナは頷いた。

「だが、ここで私達といる以上は、おまえさんもここでのやり方を学ばなければならないよ。どちらがいいか、選ぶだけでいい。少しずつ慣れていくんだよ。わかったかね」

老人のあたたかな感情が伝わる。
「ええ…」
その日は、老人のとりなしで、何とかことなきを得た。
どちらもまだ、子供だった。
彼らが互いの環境を理解しようと努めるには、絶対的に経験値が不足していたのだ。
それでも、理解し合おうと互いが努力すれば、歩み寄ることはできるのだ。
そう、努力さえ、すれば。
たとえ真の意味で、理解できないとしても。

次の日、マナは外で散策をしていた。
別に目的はないのだが、ここにはマナにとって目新しいものがたくさんありすぎるので、退屈だけは、することがないのだ。
やわらかな風の中、マナは不意に、少し離れた草原に、生き物の姿を見つけた。
「かわいい！！」
思わず、声に出してしまい、慌てて口元を押さえる。
前に学習した時、見たことがあった動物、ウサギだ。耳が他の動物より長いので覚えていた。一匹だけではなかった。大きいウサギが一匹。それより小さいウサギが三匹ほど、かたまって動いていた。どうやら親子らしい。
（もっと近くで見てみたい）
そう思った。だが、近づいてもいいものなのかどうか、自信がなかった。
どうしようかと悩んでいると、視界の隅にユウの姿をとらえた。
「ユウ、ユーウ」
声をひそめて呼びかけ、急いで手招きすると、ユウは訝しげな顔で走ってきた。

自分も興奮していて、マナはユウが手に持っているものにほとんど注意を払っていなかった。
「どうした、マナ」
「ねえ、ユウ、あれ、ウサギでしょう？　本物のウサギよね。近くにいってみても大丈夫かしら」
マナの指差す方を見つめ、
「いや、だめだ。逃げる」
ユウはすばやく手に持っていたボウガンを取り上げ、ねらいをします。
ボウガンを見たことのないマナでも、それが武器であることはすぐにわかった。
「何するの、ユウ！？」
「捕まえるんだ。今日の夕飯にする」
マナは驚いた。

（ウサギを食べる？）

ユウの言葉が信じられなかった。
動物の肉を食べるなんて、聞いたこともない。瞬間に、鳥肌が立った。
「駄目よ、あんな小さい生き物を殺すなんて！！」
だが、言いおわる前に、矢はボウガンを放れ、狙いを過たずに親ウサギの背中にあたった。
「！？」
すぐにユウが、ウサギのところに走っていった。子ウサギはすでに逃げていた。
ウサギの耳を無造作につかんで、ユウは平然とこちらに戻ってくる。
マナは動けなかった。身体が震えていた。
すぐ近くまで来た時、生臭いにおいがした。血のにおいだった。

それが、ひきがねになった。
「なんてひどい!!　命を殺すなんて、最低だわ!!」
叫ぶように、マナは言葉をぶつけた。
ぶつけられたユウは、なぜそんなことを言われるのかわからないといった顔つきで、マナを見ている。
「何言ってるんだ?　食わなきゃこっちが死ぬんだぞ」
「自分が生きるために、他の生き物を殺してもいいって言うの!?　そんなの間違ってるわ、おかしいわ!!」
「ウサギは貴重なたんぱく源なんだ。マナだって、食べればうまいって思うさ」
呆れ返ったようにユウは肩を竦めた。
「信じられない、こんなひどいことするなんて。あたしはウサギなんか食べない。絶対食べないわ!!」
「わがまま言うなよ、マナ!!」
「自分で決めろって言ったのはユウじゃない!!　あたしが食べないって決めたのよ。どうして怒るの!?」
互いに睨み合ったまま、二人はしばし動かなかった。
口を開いたのは、ユウの方だった。
「勝手にしろ!!」
苛立たしげに足元の瓦礫を蹴りつけ、ユウはその場を離れた。
マナはその場に座り込んで昨日に引き続き、声を殺して泣きだした。

「マナ、夕食を食べないんだって?　どうしたんだい?」
日が傾いてきたころ、部屋にこもったきりのマナの様子を、老人が見にきた。マナはベッドの中で、シーツを頭からかぶってふて寝していた。
「だって、気持ち悪いんだもの」
「気持ち悪い?」

がばっ、とシーツを取り払って、マナは起き上がり、老人と向き合った。
「知らなかったのよ。ここで食べているものが、動物の体だなんて。動物を解剖するのを、ディスクで見たことがあるわ。あんな小さくて可愛いものの体を食べるなんて、信じられない」
老人は困ったように笑った。
「そうだなあ。何も殺さずに、奪い過ぎることなく生きていけるなら、マナの言うとおり幸せだろうけれど、生きるために、必ず人は何かを犠牲にしているんだよ」
「嘘。だって、ドームでは動物を食べたりしないわ」
「では、マナが食べるものは一体何から作り出しているんだい？」
問い返されて、マナは返答につまる。
「――わからない。知らないわ。だって、いつも用意されてあるから、それを食べているだけよ。ああいうのが初めからあるんじゃないの？」
老人は声を出さずに笑った。
「マナが食べているのは、加工品だよ。もともとあったものをそうとわからないようにつくりかえているだけなんだよ」
「じゃあ、あたしが今まで食べていたものの中には、動物の体もあったの？」
「ドームでの食事を見たことがないから何とも言えんが、多分な。きっと豚か、牛かなんかだろうな」
じわりと、マナの瞳が滲んだ。
「あたし、死んだ動物の体を食べて生きてきたのね」
老人は、マナの隣に腰をおろし、そっと手を握った。安心させるように。
「マナ、我々人間は、そういう生き物なんだよ。生きるために、別の命を奪って、それを食べる。人間だけでもない。生き物というのは、そういうふうにしか生きていけないようにできているんだよ」
「そんなの哀しすぎるわ」

「ふむ。では、こう思うといい。おまえさんに食べられた動物は、おまえさんの一部になったのだと」
「一部？」
「そうだ。食べられた動物は、おまえさんの血に融け、新たな肉となっておまえさんとともに生き続ける。だから嘆く必要はない。おまえさんは、自分の命を大切に生きるんだ。それが動物にとっても救われる」
マナは不思議そうに老人を見つめた。
「それは、本当のこと？」
「おまえさんが信じれば、それはいつでも真実なんだよ」
穏やかに諭されて、マナは何となく納得したくなった。
老人の言葉は、何だかあたたかく心に伝わるのだ。その証拠に、さっきまであんなに哀しかったのに、今は全然平気だ。手のぬくもりと一緒に、老人の感情が伝わったからだろうか。だから、マナはそれを信じることにした。
「ユウは、あたしのこと嫌いなのかしら？」
不意に呟いたマナに、老人は驚いて問う。
「なぜそう思うんだい？」
「だって、いつも怒ってばかりだわ。初めはとっても優しかったのに。怒られたって、あたしにはどうしようもないのに。あたしにとってはそれが当たり前だったんだもの。急に違うって言われても、わからないじゃない。でも、ユウはそんなことちっとも考えてくれてないんだわ」
「マナは大事に育てられてきたのだなあ」
老人の言葉に、マナは微笑んだ。
「ええ。みんな優しかったわ。博士も、フジオミも。周りにいたクローン達もみんな。ユウみたいにうるさく言わなかったし、あたしに怒ったりしなかったわ」
そこまで言うと、不意にマナの表情が哀しげに歪んだ。
「――おじいちゃん、あたしドームに帰りたいわ。ユウに言ってみ

てくれないかしら。ユウだって、きっともうあたしの顔なんか見ていたくないはずよ。嫌われてるんだもの。あたしがいなくなった方が喜ぶかもしれないわ」

「マナ。ユウがおまえさんを嫌いになるなんてことはないよ。ただ、ユウにもわからないんだよ。おまえさんにどう接すればいいのかね。ユウは同じ年頃の子供と話したことがない。周りはみんな大人ばかりだったからね」

「ユウも、同じ？」

「ああ。きっとユウも今頃後悔しているよ。なんとか仲直りしておくれ。おまえさんも、ユウと喧嘩したままドームに帰るのはいやだろう？」

「ええ。でも、ユウは許してくれるかしら」

「大丈夫。おまえさんを許さないなんてことは、絶対にありえないよ。ユウはマナを大好きだからな」

「そうならいいんだけど」

階段を上がってくる気配をドア越しに感じて、マナは大きく息を吸った。そして、大きく吐くと、思い切ってドアを開けた。

「ユウ」

振り返ったユウは、少し驚いた顔をしていた。まるで、マナが自分に話しかけるのが信じられないように。だが、すぐにそんな表情は消える。マナのちょうど斜め向かいの自室に入ろうとノブに伸ばしていた手が離れる。

「何？　何か用があるのか？」

「ええと……」

かけるべき言葉を用意していなかったことに、マナは気づいた。声をかければ、どうにかなると思っていたのかもしれない。

「マナ？」

じっとユウを見ていたが、その表情からは何の感情も読み取れな

い。どんな言葉をかけるか考えるより先に、マナはユウの手を両手で捕まえた。

ドームでは感じたことはなかったが、ここへ来てから、マナには不思議な力が現われるようになっていた。ユウや老人に触れているとその時の感情がわかるのだ。もちろん、考えていること全てがわかるのではない。ただ、言葉として感じられない感情を、波のように、温度のように、感じ取ることができるのだ。そして、もっと不思議なことに、ユウに対して、この力はもっとも強く働いた。

ユウが咄嗟に離れようとするのを、そのまましっかり逃がさない。触れる手から流れこんでくる感情。戸惑いと、痛みによく似た切ない感情だ。

「マナ、これはずるい……」

「だって、言葉だけじゃユウの気持ちはわからないわ。ユウは全部を言ってくれないもの。それに、本当のことをいつでも言ってもくれないわ」

手を離さないマナをあきらめ、ユウは溜息をついた。

「言いたくないんじゃないんだ。ただ、どう言っていいのかわからないだけだ――」

「ユウ……」

ユウの言葉は正直だった。彼の感情には様々な揺れが感じられた。

「思ってることを正直に口にするのは、俺には難しい。だって、そんな必要、今までなかったから」

マナと接するうちに、ユウも気づいていたのだ。それまで自分と一緒にいてくれたのは大人達ばかりだったことを。多くを語らずとも、彼らはユウの感情の機微を敏感に察してくれていた。だが、マナは違う。自分よりも年下の少女だ。老人達と接してきたようにはいかないのだ。

「言わなくても、いつもみたいに通じるって思ってた。おじいちゃん達はみんな、俺が何にも言わなくても俺の言いたいことわかってくれてた。でも、マナには俺の考えてることが通じないから、どう

していいかわからなくて、苛々してたんだ」
「ごめんなさい。あたし、自分のことばかりで、ユウの気持ち、全然考えてなかったわ。あなたも、平気なはずないのに」
「違う。俺が悪いんだ。俺が勝手に苛々して八つ当りしたんだ。わかってなかったんだ。俺が考えること、マナもわかるって勝手に思ってたんだ」
　互いの中で、相手に対する戸惑いや怒り、悲しみなどの微妙な感情がとけていくのがわかる。マナはさらに言葉を繋ぐ。
「ねえ、あたしたち、もっといっぱい話しましょうよ。そうしてお互いをもっと知るのよ。そうすれば、きっともっと楽しくなるはずよ」
「話すって、何を話すって言うんだ？」
「何でもいいのよ。心の中までは、わからないもの。伝えたいことはきちんと言葉にしなくちゃ。あたし、あなたに怒られるたびに悲しくなるの。あなたがあたしを嫌いなんだって思ってしまうの。そんなのいやだわ」
「俺は、マナを嫌ったりなんか、してない。ただ、マナが何でも俺に決めてくれって言うのがいやなんだ。だって、何だかどうでもいいように聞こえるんだ。何もおもしろくない、何もしたくない、そんなふうに思ってるからどうでもいいって答えるんだって、思ったんだ」
　マナは慌てて首を振った。
「そうじゃないわ。どうでもいいんじゃないの。あたしね、今まで、自分で決めたこと、なかったの。だって、そういうことは博士がみんなやってくれたから。あたし、ドームではみんな決めてもらってたの。それが当たり前のことだったから。ずっとそうだったから。ここではユウが決めてくれると思ってたの」
「俺は、マナに自分で決めてほしいんだ。それが俺の気持ちと違ってても、同じでも、とにかく、マナの気持ちが知りたいんだ」
「わかったわ。今から、そうする。自分がしたいこと、行きたいと

ころ、見たいところ、自分で決めるわ。それなら、ユウはもう怒らない？」
「――うん」
「よかった」
マナはほっとしてユウから手を離した。
「ねえ。あたしたち、怒ったりしそうになったら、ほんの少し我慢して考えましょう。自分の気持ちをきちんとわかってもらうためには、どんな言葉を使えばいいのか。どう言えば、きちんと伝わるのか、そういうことを、一緒にやっていきましょうよ。そうしたら、きっともっと仲良くなれるし、お互いを好きになれるわ」
「俺は、今だってマナが好きだよ」
「ええ。あたしもユウが好きだわ。でも、やっぱりそれって、言葉にしなくちゃわからないじゃない？　あたし、今ユウと話せてよかったわ。ユウの考えてること、ユウが言葉にしてくれたからきちんとわかったもの。あなたも、あたしが考えてたこと、わかってくれたでしょう？」
「ああ」
「ね、そんなふうにお互いのこともっとわかったら、喧嘩しなくてもよくなるわ。それに、前よりもっと好きになれるわ。だから、これからはたくさん話をしましょう」
一生懸命に語るマナに、ユウは微笑った。
「わかった」
「よかった。じゃあ、あたし、もう寝るわ。おやすみなさい」
「ああ。おやすみ、マナ」
背中を向けてから、マナは思い返したようにマナは振り返った。
そして、ユウに言う。
「ねえ、ユウ。明日からあたしにも、料理の仕方を教えてくれる？」
「マナ！？　無理しなくていいんだ！！」
また何を言いだすのかといったように、ユウは困った顔をした。
だが、マナはユウが先程言ったように、自分で考え、自分で決め

るには、もっとたくさんののことを知らなければならないのではないかと思っていたのだ。

そう話すと、ユウは素直に納得してくれた。

「一緒にいるんだもの。あたしもできることをしなくちゃ。でも、自信がないから、ちゃんと教えてね」

08

マナの料理を習うという初めての試みは、驚きの連続ばかりだった。

何しろ、出されたものを食べるだけだったのだから、料理に関する基本的なことさえも知らないのだ。自分が食べていたものが、本当はどんな形をしていたのか、それを知るだけでも、マナには新鮮だった。

覚えることは、もちろんそれだけではない。

材料を切ったり皮を剥くための器具の扱いや、調理のための器具の名称、たくさんありすぎる調味料の使い方、それらの準備や後始末、また食事のためのテーブルセッティングや食器の使い分けなど、きりがないほど学ぶことはたくさんあった。

だが、今度は楽しく料理をすることができた。

朝昼晩と、料理を作るときだけでなく、空いている時間全てを使って、ユウが最初から丁寧に教えてくれたからだ。マナの失敗を怒ることなく、時間をかけて根気強く教え続けた。

そうして、一週間もすると、食事の支度のほとんどは、マナにもできるようになっていた。もちろんユウも一緒に作るが、下ごしらえ程度だ。仕上げはどんなに時間がかかってもマナにやらせてくれる。

マナは朝起きて身支度を整えると、すぐに朝食の準備をする。

テーブルを拭き、食器を並べる。

熱いスープとご飯をよそい、昔ながらの箸で、大皿に持ったおかずを取り分け、つつきあう。

老人とユウと三人で、一日の予定を話し合いながらの食事。

他愛のない会話で、笑い合いながらの食事。

それは、マナの今まで知らなかったもの。学びはしたが、実現す

ることはないと思っていたもの、だった。

ユウは食器を洗いながら、マナはお昼のお弁当にするおにぎりを握りながら、これから登る、廃墟の東にある森の話をしていた。

「ねえ、ユウ。動物は、いるの？」

「ああ。うまくすれば、近くで見れるかもしれないな。見たい？」

「ええ。あ、ユウ、お塩とってちょうだい」

「ん」

「卵は茹でたのを持っていきましょう。それと、飲み物も。お茶がいい？」

「熱いのがいいな」

「ええ。これが終わってからね」

手際よく握ったおにぎりを包むと、マナは手を洗い、お茶の支度に取りかかる。

「お湯は沸騰してからよね。でも、入れるのは少し温度を下げてから」

「ああ」

やかんを火にかけるマナを見ながら、ユウが微笑う。

「マナ、料理も、お茶を入れるのも、俺よりずっと上手くなった」

「ほんと！？」

嬉しそうにマナが笑う。自分の料理や手際を誉めてもらうのはとても気分がよかった。マナはのみこみがはやく、器用だったので、コツをつかめば、ユウに教えられたことも二、三度で、すぐにできるようになってきていた。

今までマナが学んできたのはディスクによる知識ばかりだったから、何かを作ったり、身体を動かして体験することはほとんどなかったのだ。

ドームでも、もちろんすることはたくさんあった。

ディスクによる学習、健康を維持するためのジムでのトレーニン

グ、そして、たくさんの検査。それがマナの義務だった。
空いた時間は読書や娯楽ディスクを観るなどはできたが、それもシイナによって厳選されたものを与えられるだけ。だから、時間というものは、マナに関係なく、ただ緩慢に流れ去っていくだけのものでしかなかった。
ここでの時間は、本当にあっという間に過ぎていく。
今までの生活と違い、不便なことはたくさんあった。それまでマナが当然だと思っていたことは、全て他人の手で整えられていたものだったのだ。
しかし、料理を含め、ここでは生活するために必要なことは全て自分達でしなければならなかった。
マナは初めて自分が着る服を洗濯し、干すことを知った。自分の部屋やトイレ、バスルームを自分で掃除することも知った。畑の草むしりも、水やりも知った。目を楽しませるために、花を摘んで飾ることも知った。風の流れ、雲のかたち、太陽の沈む様子で次の日の天候がわかることも知った。星の位置で、方角がわかることを知った。そして、傍らでそれらを教えてくれる人がいることの喜びを知った。優しい人達と一緒に過ごす幸福を知った。
一日一日が待ち遠しく、愛おしく、マナにはとても貴重だった。
今、マナは自分の意志で全て選び、自分のしたいことをすることができた。
自由。
今初めて、それを実感していた。たくさんの言葉を識っていても、本当の意味で知ることのなかったそれは、マナにとって、紛れもなく幸福だった。
小高い山を登りきり、マナとユウは下の景色を見下ろしていた。

もっと西には深緑に覆われた山がそびえている。
「ここからの眺めが、一番綺麗だ」
「ええ。とても綺麗だわ。なんて深い緑なのかしら。なんてあざやかな色なのかしら。山も素敵ね。霞んだ緑が、とても綺麗」
「おじいちゃんが言ってた。あそこは、レイジョウだったんだって」
「レイジョウ？」
「死んだら行くところだって」
「？　死んだらどこにも行けないわ」
当たり前なマナの問いに、ユウはかすかに笑ってしまう。
「あ、今あたしのこと笑ったでしょう」
「うん」
「だって、おかしいわ。死んだら動けないわ。生命活動が終わるってことだもの」
「身体が行くんじゃないからさ」
「身体以外、人間に何があるっていうの？」
「魂」
「たましい？」
「意識さ」
「死ねば意識は失くなるわ。意識が失くなるということが、死ぬってことだもの。違うの？」
「おじいちゃんは、身体が死んでも、意識は死なないって言ってた。身体はかりそめの器で、俺達はみんな、その器に入っているだけなんだって」
「かりそめ？」
「一時的なってことさ。おじいちゃんがよく使う言葉だ」
「そんなの、聞いたことないわ」
「じゃあ、おじいちゃんに教えてもらうといい。おじいちゃんはそういうことにすごく詳しいから」
言い終えると、ユウはまた遠くへと視線を向けた。だが、マナはユウの先程の話を心の中で反復していた。

「でも、綺麗なところへ行くのはいいことだわ。だって、もし淋しくて何もないところへ行くのなら哀しいもの」
「そうだな」
それから二人は、景色を見ながら、昼食を取った。
山は深緑に覆われ、本当にとても美しかった。見下ろす景色も茂る緑に覆われ、青い空の端を切り取る、見渡すかぎりの緑の絨毯のようだ。その中にも、若草色がまばらに点在し、太陽の加減であざやかに瑞々しい色合いを変えた。風に誘われるように、葉ずれの音がする。音も色も、一体となった一つの美だった。
「こんなに綺麗なのに、どうしてドームのみんなは外に出て見ようとしないのかしら」
「昔は、こんなに綺麗じゃなかったからさ」
「どういうこと？」
「廃墟を見ろよ」
言われて、マナは緑の続く中、一画だけ灰色に埋めつくされている廃墟群を見下ろす。四角柱のでこぼこで、アンバランスな建造物は、確かにお世辞でも美しいとは言えなかった。
「昔は、あんなのが本当にたくさんあって、緑なんかほんの少ししかなかったんだってさ。汚い空気が充満してて、水も土も汚れ放題、ゴミで溢れかえってたんだって」
「ゴミ？　ゴミって何？」
「必要のないものさ。例えば野菜の皮や残り物のご飯や、そんなものかな」
「え？　だって、それは必要なくなんかないわ。だって、畑の肥料になるでしょう？」
「廃墟に住んでた人間は、畑を作らない。他にも、新しいものが欲しくなると、まだ使えるものでもどんどん捨てていくんだって。捨てることが、捨てるほどたくさん物があるってことが、幸せだと思われてた時代があったって。だから、そこでは捨てることは悪いことじゃなかったんだ。そうして、みんなで捨てて捨ててゴミだけが

どんどん増えていった。ゴミを捨てるために木を切ったり、山を削ったり、川や海に捨てたりしたって聞いたよ。そんなの、誰も見たいって思わないだろ？」

「捨てるくらいなら最初から作らなければいいのに。でも、ますます変よ。だって、今はこんなに綺麗じゃない」

「ずっとドームの中にいたから、外が綺麗になってたってわかんなかったんじゃないかな。それに、時間が経てばこの風景だって見なれないものになってくる。見なれないものを急に目にしても、いいとは思えない。だから、誰も見なくなったのかも」

「あたしが初めておじいちゃんを見て驚いたみたいに？」

「ああ。でも、マナはもうおじいちゃんを恐いとか思ったりしないだろ？」

「それどころか大好きになったわ」

「そういう気持ちを、きっとみんな持てなかったんだ。だから誰も外に出てこようとしなかったのさ」

哀しそうに、マナは頷いた。

「そうね。こんな綺麗な景色なのに。それを綺麗と感じられないのなら、それはとても悲しいことだわ」

空も雲も太陽も風も木も草も花も、マナにとっては全てが美しかった。

「おじいちゃんの言ったとおりね。世界は、とても美しい色で溢れているわ。空も雲も土も草も花も、みんな美しい色で満ちている。ねえ、ユウ。あたしがドームの中で見たたくさんのものの中で、これほど美しいと思えるものはなかった。きっと、人間の作るどんな人工物も、自然の成し得る造形には適わないんだわ」

世界は美しい。

それに気づかずにいるのは、とても淋しく、虚しいことだ。

「人間って、あんまりいいことしてなかったのね」

「マナ？」
「だって、おじいちゃんも言ってたわ。この世界では、人間だけが異質なんだって。人間がたくさんいた頃は、世界はとても病んでいた。やがて、この地上から一人も人間がいなくなったとき、そのときこそ、世界は一番美しいだろうって。
あたしたちって、本当はそんなに大事じゃないのよ。この世界にとっては、いなくてもいい存在なんじゃないかしら」
「そうかもな。でも、俺は、マナがいてくれてよかったよ。おじいちゃんがいてくれて幸せだった。マナはどう？」
「もちろん、あたしもよ。ユウとおじいちゃんがいてくれて、とても幸せよ」
「それでいいんじゃないかな」
「え？」
「世界にとって必要じゃなくたって、別にいいんだよ。自分が大事に思える人がいて、その人から大事に思ってもらえれば、それだけで、俺はいいと思うんだ」
「世界にとって、異質でも？」
「世界にとって、異質でも」
「他に何の意味もなくても？」
「他に何の意味もなくても」
マナはユウの答えに戸惑った。
「よく、わからないわ。だって、そんなこと言った人、誰もいないもの」
「マナ。別に、俺の考えが本当だとか、絶対だってことじゃないんだ。ただ、俺はそう思ってるって、それだけだ。マナが無理にそう思う必要はないんだ。俺もマナも、違う考え方をする。それと同じで、みんなが同じ考えじゃなくてもいいんだよ」
「本当？　本当にそれでいいの？」
「だってマナ、ここにいるのは俺達だけだろ？　他の誰の許しがいるのさ」

「だって――」
ドームの話はしたくなかった。ユウがそれをいやがるのがわかっていたからだ。
「ここはドームじゃないよ」
だが、意外にもユウは笑っていた。
「ユウ？」
「ドームでは許されないことだって、ここにいればそんなの関係ない。ドームにはドームの考えややり方がある。ここでは、ここの考えややり方がある。おじいちゃんはそう言ってくれたよ。俺はおじいちゃんの考え方ややり方が好きだ。だから、好きな方をとる。さ、もう帰ろう」
山を下りきるまで、二人は無言だった。ユウはユウで、マナはマナで、全く別のことを考えていた。次の会話までじっくりと自分の考えを整理してから再び唐突に会話をすることはよくあることだったので、二人は気にもとめていなかった。
「でも、ユウの考え方は、きっと博士は許さないんじゃないかしら」
そして、口火を切ったのは、マナの方だった。
「博士？」
「ええ。あたしを育ててくれた人よ。とても優しくて、素敵なの」
瞬間、ユウの表情が厳しく、険しいものになったことに、マナは気づいた。
「シイナか？」
「ええ、そうよ。どうして知ってるの？」
「シイナ――」
じっと空を睨んで、しばしのち、ユウは低く呟いた。
「あいつは、人殺しだ――」
その言葉に、マナは驚く。
「どういうこと？　博士が、誰を殺したっていうの？」
「マナ、俺も三歳まであそこで暮らしてた」
「あそこって、ドームのこと？」

「ああ。そうだ」
「嘘、だって、あたしはユウを見たことないし、そんなこと聞いたことないわ」
「会ったとしても、小さかったし、覚えていないのかもしれない。あいつがマナに教えなかったのは当然だ。自分が殺した子供のことなんか、他人に話す訳がない。でも、俺は忘れない。あいつが俺にしたことを。決して――」
「嘘よ！　博士は優しい人だもの、そんな、恐ろしいことできるわけないわ！！」
「あんたはあの女を知らないんだ」
「じゃあ、ユウは知ってるっていうの？　あたしはユウよりもずっと長く博士と一緒にいるのよ。あたしの知ってる博士は、そんなひどいところ一度も見せたことはなかったわ。どうしてそんなこと、信じられるって言うの！？」
次の瞬間、ボタンをひきちぎるようにユウは上衣を剥いだ。
「！？」
膚けた衣服の間から覗く右下腹部には、マナにはわからなかったが銃で撃たれた上に、化膿し、爛れたまま消えなくなった痣が、はっきりと現われていた。
「この傷を見ろ、あいつにやられたんだ。俺はまだ、生まれて三年しか経ってなかった。あいつは俺を外へ連れていった。ドームの外へ。初めて見る外の景色に喜んでた俺を、あいつは後ろから撃った。この傷を見ても、嘘だって言えるのか！？」
「――」
反論できなかった。わかるのだ。なぜわかるのかはわからないけれど、ユウの言葉は真実だ。それがわかっているからこそ、信じたくなかった。
大好きなシイナ。

優しくて、綺麗で、何でも知っていて、何でもできる、大好きな彼女がそんな恐ろしいことをするなんて。

他に何も考えられない。

ただ、苦しかった。

「――」

こぼれる涙をとめることはできなかった。

ユウはマナをじっと見つめていた。

「マナは何も知らないんだ。それはマナのせいじゃないけど…」

「――」

ユウはそのまま、一人で廃墟へと戻っていった。

「博士…嘘よね、そうよね…」

09

夕暮れが近づき、部屋の中が徐々に薄暗くなる。
しかし、マナは動かなかった。
控えめなノックの音にも、扉を開けて入ってきた老人にも、気づいてはいたが動けなかった。
「マナ。今度は一体どうしたんだね？」
自室の床に座り込んだまま、声をかけられてようやく振り返ったマナは、泣きはらして真っ赤になった目で老人を見上げた。

「おじいちゃ…」

声を出すと同時に、涙があふれる。
マナは老人にしがみついて声をあげて泣いた。
「ユウに聞いても何も答えんし。おまえさんはおまえさんで部屋を出てこんし。最近は喧嘩することもないから安心していたのに、よくもまあ、おまえさんたちは」
「だって、ユウが、ユウが…」
「ユウが何か、おまえさんに言ったのかい？」
マナの頭を優しく撫で、老人は問う。
「ユウが、博士に殺されそうになったって言ったの。でも、博士は優しい女なのよ。あたしを育ててくれたの。本当に、素敵な女なのよ。おじいちゃん、本当なの？　博士が、ユウを殺そうとしたの？」
老人は一気にまくし立てたマナの言葉を理解すると、一瞬眉根をよせ、それから、首を振った。
「そのことなら、私には、わからんのだよ。実際にそれを見たわけではないからな」
老人はマナをベッドに座るよう促し、自分も彼女の隣に腰を下ろ

した。

「ユウを見つけたのは、私と死んだ妻だったんだよ。私達は、ここに住む前は、もっともっと南の方に住んでいたんだ。そう、もっとドームに近かった。

その日は仲間も含めて山菜を採っておこうと遠出をしたんだ。歩き疲れて川の近くで休もうと、私達は水音に従って川へと出た。しばらく休んでいると、妻が突然川へと入っていってな。驚いてあとを追っていったら、岩の影に引っ掛かってぐったりしていたユウを見つけたんだよ。

私達はすぐにユウを住処へ運び込んだ。幸い、弾は貫通していたが、医療設備などなきに等しい。応急処置と輸血だけで、あとはユウ自身の生命力にかけるしかなかった。幾日も高熱が続き、傷は塞がらずに膿を持ち、私達は何度も、あの子が死ぬのではないかと思った。ようやく熱がひいても、一月以上、ユウは言葉を話すことさえできなかった」

布ごしに触れた腕から、老人のやるせない痛みが伝わってくる。強い感情や相手との接触は、マナに自分のものではない感覚を伝えてくる。ドームで暮らしていたときよりも、それは、今、確実に強くなっていた。

（でも、相手の気持ちがわかるのはいいことだわ。つらい時は、誰でも理解してほしいものだって、おじいちゃんが言ってたんだもの）

マナは老人の皺だらけの手をとり、優しく握った。

老人は目を細めてマナを見返した。

「ユウは我々よりもはるかに高い知能を持っている。そのせいかどうかはわからんが、あの子は三歳であったが、誰が、なぜ、自分を殺そうとしたのかすでに脳裏に焼き付けていたのだ。一月を過ぎて、あの子が初めて口にした言葉を、私は今でも覚えている。

『このままにはしない――』

私は、そこにいるのが本当に三歳の子供なのかと思ったよ」
「じゃあ、やっぱりユウ以外、犯人が誰かはわからないのね」
「問題は、誰がユウを殺そうとしたかではない。どうでもいい相手なら、ユウはきっとああまで思い詰めはしなかっただろう。
信じていた者の裏切り。それが、ユウの心に憎しみを植えつけたのだ。だからこそ、私は、あの子が憐れでならんのだよ」
老人は首を横に振り、忌まわしい回想を追い払うかのような仕草をした。
「ユウは心に傷を負ったまま成長した。今まで一緒に暮らしてきた私達の誰も、その傷を忘れさせることはできても、癒してやることはできなかった。
だが、マナ、私はおまえさんなら、ユウの受けた傷を癒してやれるだろうと思っとるんだよ」
「あたしが？」
「私は、ユウがおまえさんをさらってくることに反対はしたが、本気では止めなかった。
私はユウが可愛い。ずっとその成長を見守ってきた。
だが、私は確実にユウより先に死ぬ。だから、おまえさんに傍にいてやってほしいんだよ。おまえさんはユウと歳も近い。何よりユウが、一番にそれを望んでいる。
ユウは一人で生きられる能力を持っていながら、独りでは生きられない。ユウの受けた傷は、それほど深くユウの根本を抉ったのだ」
真摯な眼差しを、マナは戸惑いつつも受けとめた。
老人は本気だ。
本当に、マナがここにとどまることを望んでいる。
だが、それはできないことだ。
マナには使命がある。
それはマナの存在意義に等しい。

「――あたし、ユウのこと好きよ。おじいちゃんもよ」
後ろめたい気持ちを隠せないまま、マナは言葉を繋ぐ。
「でもね、あたしはフジオミの子を産まなきゃいけないのよ。だから、ずっとここにはいられない、と、思う…」
「それがおまえさんの意志なのかい、マナ？」
「え？」
顔を上げて老人を見つめるマナの瞳は、戸惑いの色を露にしていた。
「おまえさんは、他の誰に言われたのでもなく、自分の意志で、そのフジオミとかいう人の子供を産みたいのかい？」
真っすぐに見据える瞳に、ごまかしはきかない。
「――わからない。そんなの、考えたこともないわ。だって、そういわれて育ってきたんだもの。それが当たり前だって、思ってたんだもの。それじゃ、いけないの？」
「では、考えなさい。幸いここには考える時間だけはある。マナ、自分がどうしたいか考えるんだよ。他の誰に強要されることなく、自分の心で、見極めなさい」
老人の言葉は、それまでマナの考えもしなかったことを彼女自身に選択させようとしていた。
義務として、使命としてではなく、自分の意思で考える。
それは、マナにとってはとても難しいことだった。
少しずつ新しい世界――別の視点からの見識――を理解しているとはいえ、マナはいまだ十四歳の子供に過ぎなかった。

（ここにいなさいって、言ってくれればいいのに）

ドームにいたときは、全てシイナがマナのすべきことを教えてくれていた。
マナはただ、彼女の言うとおりにすればよかった。
疑問さえ、抱いたことはなかった。それが正しいのだと、ずっと

思っていたからだ。

「おじいちゃん、あたし、間違ってたの？」

不安げに、マナは老人を仰いだ。

皺だらけの乾いた手がマナの瑞々しい若い手を取る。

「こんな世界だ。間違っていることが、悪いことだとは言えんよ。我々人間は、確かに選択を誤った。だが、今更それを否定できはしない。そのまま進むしかない。だからこそ、決断は自身でするのだ。自分が決断したことなら、その後悔ですら自分だけのものだ。誰かの所為にして生きても、それは本当に自分の生を生きたとは言えんのだよ」

10

シイナは長い廊下を歩き、カタオカの部屋へと向かっていた。オートドアには自由な入室を許可することを示す緑のライトが点いていた。そのまま部屋の前に立つと、すみやかにドアは左右へ開いた。

「お呼びと聞きましたが」

「ああ。入りたまえ」

カタオカは議会の長でもある。その理由は彼が議員の中でも最年長者であるとともに、ていのいい周囲の責任転嫁でもあると、シイナは思っていた。

議員と呼ばれる者は、そのほとんどが四、五十代である。いま現在の人間の平均寿命は六十歳前後だ。

後は死を迎えるだけの人々は、全てにおいて希薄で、もはや己れの意志すら持っていないようにも思える。

実際、彼等にはどうでもいいことなのだ、この世界のことなど。もはや己れの死にさえ関心を持たない彼等は、当然のようにマナのこともユウのこともフジオミのことも、未来のことでさえ考えることを放棄している。

「シイナ、未だにマナはユウとともに外の世界で生存しているというのは本当なのかね？」

困惑すら見せない、静かで控えめな口調。

シイナはうんざりしていた。

「本当です。記録を見つけました。このドームへの移住し始めた頃にここを離れて外の世界へ出ていった人間がいたそうです。ここより北の廃墟群にかつての生活跡が見られました。かなり前のものなので、なんらかの理由により、そこからさらに北へ移住したと思われます。おそらく、ユウはその子孫である人間達に保護されたのでしょう」

「どうする気かね？」
「ユウを追います。マナを取り戻す、それだけです」
感情の起伏すら見せないシイナの口調に、カタオカは眉根を寄せた。
「君は一度彼を殺した。また、殺すのかね」
「生きているのなら、死ぬまで、何度でも。彼の能力は、私達には驚異です。私のミスでした。あのとき、私は彼の死体を確認しなかった――」
「愛情はなかったのかね、彼に対する」
「愛情？　私に――？」
高らかに、シイナは嗤った。
「そんなものが、今の私達の中に存在すると、本当に思っているのですか？
傑作だわ。そんなものを持ち得ない完全体であるあなたに、言われるなんて」
シイナは冷たく微笑った。本当に、美しい笑みでカタオカを見た。
「私は失敗作ですよ。そんな感情など、持ち合わせているわけがない。あなたでさえ持たないものを、どうして私に持てるとお思いですか？」
「シイナ――」
「あなたに、愛するということがわかるのですか？　あなたとて、誰も愛さなかったくせに。全てを愛しているなんて、言わないでください。当の昔に私達から失われた感情について今更議論しても、何にもなりません」
「――君の考えていることが、私には理解できないのだ。私達とは違うものだからか？　君の望みはなんだ？　なぜそんなに、君の意志は強い？　どうしてそんなに、私達と違うのだ――」
「あなたはもう、理解することさえ放棄してしまった。わからないのは当然です」
シイナは一礼してカタオカに背を向けた。

「シイナ、こだわりを捨てたまえ。もはや、誰もがわかっている」
その言葉に、シイナは立ち止まる。だが、振り返りはしない。
「我々の滅びは止められない。もう、どうあがいても無理なのだ――」
苛立ちに似た感情を、シイナは微かに顔に表した。
ゆっくりと振り返り、カタオカに視線を据える。
「あなた達は、あきらめたまま残る時を過ごせばいい。
何も残さず、意味もなく、死ぬまで生きればいい。
私は違う。
私はあきらめない。黙って、何も残さず生きたりしない。
それが例え気休めにしか過ぎなくても、私は自分の存在意義を見つけだします。死ぬ最期の瞬間まで、あがき続ける――」
強い意志が、そこにはあった。
けれど、それは、カタオカにとって最も痛ましく思えるものだということを、彼女には理解できなかった。
「――シイナ、私は、君が憐れでならない」
だからこそ、こんな言葉にも、傷つきはしない。
「憐れみなら、いくらでもかけてください。今更遅かったなどと責めたりはしません。
でもそれは、私にとってもう何の意味もない」
それ以上の言葉はなかった。
シイナは再び振り返ることはなかった。
そしてそのまま部屋を出た。
「――」

長い廊下を足早に歩きながら、シイナは堪えきれない怒りを感じていた。
くだらない不毛な会話を続けたことを後悔していた。
もはや話し合う価値さえないのに。
シイナはカタオカを尊敬していた。カタオカは、フジオミにもシイナにも分け隔てなく接してくれた。シイナには、生殖能力がなかったにもかかわらずだ。
だが、それは愛情からではない。ただ単に、どうでもよかったのだ、彼にとっては。
だからこそ、あんな決定ができたのだ。

フジオミの発言を尊重しよう。シイナ、君は君の義務を果たしたまえ。

その時、シイナは自分を支えていた世界が壊れたのを知った。
愛されていると信じていた。
例え自分に、生殖能力がなくても。
だが、残ったのは屈辱と、嫌悪と、怒りと、絶望だけだ。

シイナ。私の決定は君をそんなに傷つけたのか。

あの日を境にすっかり変わってしまったシイナに、カタオカは苦しそうに尋ねた。
まるで、後悔でもするように。
だが、もはやシイナには彼の贖罪など、どうでもよいことだった。

壊れたものは戻らない。
優しい過去へは戻れない。

許してくれと言いたげなカタオカに冷たい一瞥をくれて、あの時

シイナは彼に背を向けた。
もはや彼に対しては、軽蔑しか持てなかったのだ。
それなのに、フジオミのために自分を犠牲にしておいて、なぜそんなことが言えるのだ。

組み敷かれて恐怖に泣き叫んだあの時間を、踏み躙られズタズタにされた誇りを、自分は一生忘れないだろう。

忌まわしい過去が甦ってくる。
同時に、嫌悪が身を貫く。
嘔吐感に襲われ、シイナはきつく瞳を閉じた。
震える身体を必死に押さえつける。
あの過ぎてしまった時間を思い出す時、いつも身体が拒絶反応を起こす。それ以外は、フジオミに抱かれているときでさえ、こんなことは起こらないのに。
「――」
震えが徐々に収まるのを感じながら、シイナは改めて、今回の事件の元凶となったユウに対して、新たな怒りを感じた。あの時、きちんと殺してさえいれば、計画は順調だったのだ。
自分の失態だ――シイナはきつく拳を握った。

「何としても、マナは取り戻す。今度こそ殺してやるわ。死ぬまで、何度でも」

11

マナと会わない日が三日続いた。
彼は今、マナが唯一来ない地下にいた。いつものように。
この一年、日課となった作業を機械的にこなす。
体を動かしている間は何も考えなくてすむが、作業が終わればまた、現実を直視しなければならない。
必要な電源だけを残し、それ以外のすべてが消えていることを確かめると、ユウは部屋を出ようとして、ふと足を止めた。
ここから出たら、マナに会ってしまうかもしれない。
その時、自分は一体何を言えるだろう。
マナの前であんな風にシイナを非難したが、自分にその資格はあるのか。
自分だって、全てをマナに話しているわけではない。
こうして真実に触れる部分は隠したままだ。
全てを教えもせずに、マナに判断しろなどと、本来なら言える訳がないのだ。
マナが苦しいように、ユウもまた苦しかった。
マナを傷つけたいわけではなかった。
ただ、哀しいだけだ。哀しみだけが、日毎に強く、この胸を圧迫していくから。
時折、呼吸していることすら億劫になる。
今ここにいる自分が、嫌で嫌でたまらない。
許してほしいのに。
一番に誰よりも。
どんな愛でもいい。
必要としてほしい。
ここにいてもいいのだと言ってほしい。

望むのは間違いなのか。
愛されないから憎むのか。
シイナという女を、怒りなしに思い起すことは不可能だった。
だが、今ユウは怒りだけでない感情を、呼び起こさずにはいられなかった。

向けられた微笑みを。
あたたかな眼差しを。
優しく語られた言葉を。

もうとっくに忘れかけていたあたたかな感情まで甦るのは、苦痛に近い。
ユウは胸を押さえた。
あの頃は、全てを信じていられた。
世界は自分のためだけにあるように、幸福だった。
「――」
シイナの面影と、マナが重なった。
シイナのように、いつかマナも、自分から去る。
欲しいものは、決して得られない。

どうして、自分は――

ユウは顔を上げ、振り返り、ただ一点を凝視した。
「……どうして」
決して彼を受け入れない、その姿を。
「教えてくれ。どうして、あんたのその目に、俺は映らないんだ。生きているのに。触れられるのに。どうして俺だけを切り離すんだ……」
それは決して届かない、声だった。

地下室を出てから真っ直ぐ自室へ戻ったユウだが、気分が晴れずに外へと向かおうと部屋を出、階段を降りた。

「ユウ？」

階段の踊り場で呼び止められ、苦い思いで顔を上げる。

だが、今は誰とも話をしたくなかった。口を開けば、自分はまたマナにあたりちらすだろう。

ユウは黙って階段を下りて外へと向かった。

追いかけてくる足音が響く。

「ユウ、待って。あなたに話があるのよ」

マナの声に、ユウは振り返った。

彼女は真っすぐにユウを見つめていた。

彼が戸惑いを覚えるほど一途に。

マナは階段を駆け下り、ユウの前に立った。

「ごめんなさい、ユウ。あなたのこと、疑ったりして。とても反省してるわ。

でも、あたしは博士が好きなの。ユウを好きなのと同じくらい、博士もフジオミもおじいちゃんも好きなの。ユウは博士を好きなあたしを、許してはくれない？　やっぱり、一緒にいるの、いやかしら」

遮られるのを恐れるように、マナは一息に喋った。

「――」

ユウは遠い瞳で、マナを見ていた。

そのままマナを通り抜け、自分を動かすものに想いを馳せる。その感情がどういうものかは、自分からはあまりにも遠すぎて、理解することはできなかったけれど。

マナの意志は、もう揺らがない。

彼女は自分で考え、そして選んだのだ。

「シイナは、あんたに優しかった？」

穏やかなユウの問いに、マナはしっかりと頷いた。

「とても優しかったわ」
マナの気持ちは、マナだけのものだ。
自分の憎しみが、自分だけのものであるように。
ユウは、それを理解した。そして、受け入れた。
「それなら、いい。あんたはあんたが信じたいものを信じればいい。誰も、人の心に強制はできない。俺が憎む分、あんたは愛せばいい。俺が許さなくても、あんたが許せばきっとシイナは幸せになる」
不思議と、心は穏やかだった。
マナの瞳は、いつも迷わずに自分を見据える。
マナは、今ここにいる自分を、確かに見てくれる。
「マナ、あんたは強い女だ」
「強い？　あたしが？」
「ああ。とても、強い」
自分よりもずっと。

自分は一体、誰を見ているのだろう。

「俺はずっと、あんたに会いたかった。あんたが俺を知るずっと前から、俺はいつか、あんたに聞きたいと思っていたことがあったんだ」
「それは何？」
「もういいんだ。もう、どうでもいいことだから」
目の前のこの少女が愛しかった。
だがそれは、決して許されないものであることも知っていた。
「それでも、俺は、ずっとあんたに会いたかったんだ――」

12

もう何度も見直し、完璧に内容を覚えてしまった報告書に、シイナはもう一度目を通していた。

「――」

結果はどうあっても同じだった。

だからこそ、マナを育てたのだ。

未来のために。

ただそれだけのために。

「母体が、必要なのよ。完全な生殖能力を持つ女性体が――」

出来得る限りの精子と卵子は、凍結保存してあった。

だが、マナがいなければ、それも意味をなさない。

生殖能力を備えた子供の誕生には、その子を産む母親の存在が必要不可欠なのだ。

シイナはもう一度、書類に視線をやった。

唯一絶対の条件。

女性の体内で育てられること。

妊娠・分娩は母子ともに多大な負担をかける。よって、どちらにも安全な方法として科学技術の粋を懲らし、極めて完璧に近い人工子宮なるものまで作り上げた。

初めは、彼等も安心していたのだ。いつでも欲しいときに子供を得られるようになったのだから。そして、それにより結婚という概念も、彼等の意識の中では徐々に重要性を失くしていった。

誰でも、いつでも好きな時に子供を得られるのだ。精子か卵子、己れの持つものとは異なるどちらかを提供してもらえれば。

しかし、世代を重ねる内に、人工子宮で育った子供はクローンで

あるなしに関わらず、肝心の生殖能力を持たなくなっていった。
原因に気づくまでには、世界の人口は驚くほどに減っていたという。そこまで至って、ようやく彼等は自分達の現状に危機感を抱いたのだ。
このままでは、人類は滅んでしまうと。
今や人工子宮はクローニングにのみ使用される。
出来得る限りの技術を駆使して母体に近い環境を整えてものこの事実は、一体何を意味するのだろう。
やはり生命の領域は、人の手には負えぬ代物なのか。
「もっと母体がいれば――」
全てが枯渇してきている。
終末が、近づいている。
産まれない子供。
産まれない女。
本来、女児のほうが生存率が高いはずなのに、産まれてもすぐに死んでしまう。
ようやく育っても、生殖能力をもたない女が多かった。
だが、それでも、子宮さえあれば、人工受精は可能なのだ。卵子も精子も、ストックはいくらでもある。
前世紀の人間達は愚かだったと、シイナは思った。
彼等の代なら、まだ未来を救うことは出来たはずだ。女性は、まだたくさんいたのだから。
だが、彼女等は未来を考えなかった。
兆しはあったろうに、未来を救うことを放棄した。
女達は、自分達の子供を産むことに、あくまでもこだわった。自分達に連なる子供を産むことにだ。その結果が、今の未来だ。
己れのエゴで、未来が滅ぶというのに、なぜ、誰も、強制的にでも彼女等を従わせなかったのか。
そして、そのつけを、なぜ、今自分達が支払わなければならないのだ。

わずかに血を繋いできた人間がこのドームで暮らしてきてからすでに2世紀が経とうとしていた。
いくら耐久性に優れていても、当時の科学力で造られたものでは年月には勝てない。
新たに造り出すには、人員も、技術も、資源も、少なすぎるのだ。
このままでは、半世紀も待たずに人間は滅びる。

いきつく思考に、シイナは身を震わせた。

「――いいえ。まだよ、まだだわ。まだ、私達は救われる。マナが、救ってくれる」

きつく、シイナは唇を噛みしめた。

「シイナに、会っているかね」
カタオカは独り言のように呟いた。背を預けた皮張りのソファーが、ぎしりと音をたてる。
「ええ。マナの居所がつかめないので少々焦っているようです」
カタオカと向かい合って座るフジオミは、グラスを口へ運んだ。
「マナ――か。いくつだったろうか、その子は」
「十四です。もう五年もすれば、ユカのように美しい娘になるでしょう」
「ユカ――そうか、彼女が死んで、もう十四年も経ったのか……」
ユカは、カタオカの伴侶であった女が産んだ子供だった。もちろん彼の子供ではない。
子供の産まれにくいこの社会では、いつしか一妻多夫制を取り入れていた。
身体の弱かった〈妻〉は、二人目の子を産むとすぐに亡くなった。

それがツシマとサカキの血を引くマサトとユカの兄妹だ。
カタオカ自身は、自分の子供をとうとうその腕に抱くことはなかった。
ユカは何度も身篭ったが、そのほとんどは流産であった。
生殖能力があり、妊娠することができるのに、なぜか育たない子供達。
その度に衰えていく彼女の身体。
カタオカはユカに数えるほどしか会っていなかった。彼女自身に、興味すらなかった。
妊娠、出産は、多大な疲労を、肉体とその精神にかける。
子供を産むためだけの道具のように扱われる彼女。
そのためにユカは複数の〈夫〉を持っていた。
それでも、彼女はそれを不満に思うことさえないようだった。

未来のために。

誰もが口をそろえて言う。
その内の一人に、かつては自分も入っていた。
若かった自分は未来を考えながら、その実何も理解してはいなかったのだと苦々しく思い知る。
現実を見るがいい。

（未来など、何処にある――？）

彼女を、シイナを、マナを、女達を犠牲にしてまで繋ぐ未来に、何の価値があったというのだろう。
いきつく先は、すでに決まっていたことだったのに。
それはすでに、同胞達にも、考えればわかる簡単なことだったのだ。そう。考えさえ、していれば。
自分達は、どこかで何かを間違った。

今になってそれに気づく自身の愚かさを、カタオカは自嘲した。
「カタオカ？」
「いや、すまない。考え事を、していてね。もし計画が失敗しても、私は別にもう、どうでもいいのだがね。シイナには聞き入れてもらえなかったが」
「シイナにも、本当はそんなことはどうでもいいんですよ。彼女に必要なのは、自分に何ができるかということです」

そして、フジオミから逃れること。

マナがいれば、彼女はフジオミから自由になれる。
フジオミ自身それに気づいていた。が、別段気にも止めなかった。自分が満たされていれば、相手などマナでもシイナでも変わりないと思えた。
「フジオミ、君は自分の立場をどう認識している？　その義務を、どう考えているんだね？」
カタオカにとって、それは真摯な問いであった。だが、フジオミには愚問だった。
なりたくてなったわけではなかった。
ただ生まれたときから、決められていただけだ。
全てが自分の意志ではどうにもならないことだったから、彼にとっては全てがどうでもいいことだった。その点では、フジオミもまた、マナと同じく『自身』を持たない人形に過ぎなかった。
「僕には何も考えることなどありませんよ。義務は果たしましょう。ですが、それ以上を望まないでください。望まれても、僕には期待に応えるだけの気力も情熱もありはしないんです。
あなた達が、僕等をそう造った。ならばあなた達もそれ以外を考えるのはやめてください。今更後悔されても、何にもならない。
中途半端な優しさを見せるより、彼女を殺してでも止めてやったらいかがですか。それさえもできないのなら、見え透いた偽善を振

りかざすのもやめるべきです」
「――」
黙り込むカタオカを、フジオミは憐れにも思う。確かに彼はシイナを傷つけただろう。義務を優先して、その信頼を裏切ったのだから。
だが、彼だけを責められようか。
カタオカもまた、自分達と同じに義務を強いられた人間であるに過ぎないのだ。
「すみません。言いすぎました」
「いや。いいんだ」
大きな吐息をついて、カタオカは首を振った。
「実際、我々は袋小路に追い詰められている鼠のようなものだ。マナと君の子供が産まれれば、それで最後だ。それ以上増えることはないだろう。そして、マナにも正常な子供が産めるとは思えない。ユカがいい前例だ。今更過ちを繰り返すつもりはない。いずれ終わるなら、今終わらせても、大して変わりはないとも思えるのだよ」
「シイナにとっては、もっと前に言ってほしかった言葉ですね。なぜ、今更それを僕に言うんですか」
「あの頃は、私もまだ、ありえない可能性に縋っていたんだよ。そして、シイナを傷つけた。私は後悔しているんだよ。君のために、シイナを犠牲にしたような結果になったことを」
フジオミは大して気にした風もなく肩を竦めた。
「正直、僕には全てがどうでもいいことなんです。シイナのように何かに情熱をそそぐ対象もないですしね。僕はただ――」
「ただ、何だね」
「したいことのある人間がいるなら、そちらを優先させてやったほうがいいと思っているだけです。そんな風に何かに夢中になれるなんて、尊敬に値しますからね」
「だが、シイナの情熱は危険だ。すでに一度、殺人まで犯しかけている。生命の尊さを、彼女は真に理解していない。生命の重さはみ

んな同じだ。例え、それがどんな生命でも」

フジオミはカタオカの言葉に、純粋に驚いた。彼の口から、生命の尊厳を聞こうとは思ってもいなかったのだ。

「平気でクローニングを繰り返してきたあなたとは思えない言葉だ」

フジオミの揶揄に、カタオカは表情を強ばらせた。誰にでも触れられたくない部分はある。痛みを伴う後悔であるなら、それは尚更だ。

カタオカは強ばった口調で告げる。

「私が常に平静であったと、信じたいのならそうすればいい。だが、問題は私ではない。

シイナだ。彼女を、止めなければ――」

「止められますか、あなたに」

「いいや。できないだろう。シイナは二度と、私に心を開くまい。私は彼女の信頼を裏切った。君では、止められないかね」

「できません。信頼を裏切った点では、僕も共犯でしょう。僕等は彼女に義務を強いた。それを続ける以上、それ以外で彼女を拘束することはできませんね」

シイナの面影が脳裏をよぎる。

フジオミの知っているシイナは、いつも怒りと嫌悪しか彼に向けない。フジオミの方は、いつもそれを興味深く観察していた。シイナを見ていると飽きなかったのだ。

あの決して殺せない情熱は、一体何処から生まれるのだろう。同世代で生まれていながら、この違いは一体何なのだろう。

フジオミにはわからなかった。彼等の立場が、その魂の形成を大きく変えてしまっていたことを。

選ばれた者と、選ばれなかった者とに。

「――彼女を、自由にしてやってはいけないかね？」

カタオカの思いがけない言葉に、フジオミは我に返る。

「すみません。今なんと？」
「シイナを、自由にしてやってはどうだろう」
ためらいがちなカタオカは断定を避けてはいるが、フジオミにはそれが明白だ。
自分から、彼女を自由にしてやってくれとカタオカは頼んでいるのだ。
随分虫のいい話ではないか。今更。
「では、マナを見つけてください。マナがいるなら、シイナはいりません。いつでも自由にしてやっていい」
「フジオミ――」
「それができないなら、お断わりです。あなたと同じように僕だって自分が大事だ。見返りもないのに奉仕なんてできませんよ」

13

その日の午後、珍しく部屋にいなかった老人を探して外に出たマナは、廃墟の北の少し離れたところに、不思議なものを見つけた。

草を隔てて剥出しになった土が広がっている。均等な間隔に、おびただしい数で土が盛り上がっている。そこに何かを隠しているように。

その小さな山の上には、がっしりした木が立ててある。その木の全てを、マナはすぐに数えることはできなかった。あまりにも数が多すぎて。

よく見ると、立てられた木には新しいものもあれば、朽ちかけてぼろぼろのものもあった。

老人は手前の方の、まだ新しい木の前に立っていた。そこには、草に混じって、可愛らしい小さな白い花が疎らに咲いていた。

マナは静かに老人に近づいた。だが、声はかけなかった。老人は静かに瞳を伏せて両手をあわせ、そのまましばらく動かなかった。

「おじいちゃん。ここは何?」

だいぶ待って、痺れを切らしたマナが問う。

老人がマナに視線を向けた。

「墓だよ」

静かな声が、淋しげに響いた。

「はか――?」

「そう。みな、私をおいて死んでしまった。彼等は、ここに眠っている」

「死んだ人を、土の中に埋めるの?」

非難めいた声音に、老人は穏やかに微笑って振り返った。

「そうだよ。それこそが連鎖というものなんだよ、マナ。我々はあらゆるものを殺して食している。だから、死ぬときが来たら、私達

は今まで奪ってきたものを還さなくてはならないんだ」
「還すって、どうするの？　死んでからどうやって還せるの？」
「私達が、唯一所有できるもの、肉体を、土に還すんだよ。死ねば身体は腐敗する。それがよい土壌を育て、そこに新しい生命の誕生を齎らすんだ。
　ここに眠る彼等は、土に還ったのだ。土と同化して新たな命を産み出し、自らもやがて新たな命となる。それこそが自然の理だ。全てが等しく循環することが。だが、一時、人間はそれを放棄したんだよ」
「どうやって？」
「体を、焼いたのさ。焼いて、石の囲いの中に閉じこめた。思えばその頃から、人間はおかしくなりはじめたのかも知れん」
　憂えた瞳で、老人は遠くを見つめていた。
「大地には浄化作用がある。形あるものを分解し、己れに取り込み、一部として、もう一度新たなものに産み出す。全ての命を再生する、そんなことができるのも大地だけだ。人間は、それを忘れてはいけなかった」
　老人は、その時初めて、マナを振り返った。そして深い感慨をこめた眼差しで彼女を見つめた。
「マナ。全てのことには、意味があるのだ。それが何なのかを探すのが、人間の生きるということだ。この世界で意味のないものは何もない。全ての生命に、意味があるのだよ。そう、死ぬまで、いや、死んでも――」
「死んだら、それで終わりでしょう？」
　不思議そうに、マナが首を傾げる。
「ある意味では、それが正しい。だが、昔、人は死んでも魂は残るのだという思想があったんだよ」
「ユウに前に聞いたわ。あの西の山は、魂が行く場所だって。レイジョウっていうんでしょう？　魂って、あたしたちの意識なんでしょう」

「ああ。魂とは、人間の核とも言えるものだ。そう、例えるなら、我々は肉体という入れ物の中に閉じこめられた意識であるということだ。だから、肉体が生きている間は、それが自分だと錯覚する。だが、肉体が死ねば、魂は解き放たれる。痛みもなく、哀しみもなく、苦しみもない彼方へ」

「かなたって？　魂は、何処にいくの？」

「さあ、それは何処か私にもわからない。まだ死んだことはないからなあ」

「死んだことないのに、どうして魂がどこかにいくなんてわかるの？」

「信じているんだよ。死で全てが終わるなんて、あんまりいい考えとは思えないからね。そういえば、古い宗教には生まれ変わりの思想もあったそうだが――」

「おじいちゃん、宗教って何？」

「私にも、よくはわからんがね、ある特定の、神、または特別な人間の思想を信じることだそうだ。いわゆる、人の心の支えとなったものか」

「神って言うのは？」

「人間ではないもの、我々を、いや、我々だけでなく、この世界全てを創ったもののことをそう呼ぶのだ」

マナは眉根を寄せた。

この神という概念を、彼女は理解できなかった。

マナの知識の中に、神というものはない。宇宙、地球、生命の誕生、それら全てはディスクの中で見聞きしただけのことで完結していたからだ。

シイナは、マナに倫理や哲学という抽象的な精神世界に関することを教えなかった。非科学的なものを全て排除したのだ。

そんな彼女の表情から、老人は簡単に付け加えてやった。

「要するにだ、我々普通の人間とは違い、できないことを全てできるもののことだ」

「じゃあ、ユウだわ！　ユウが神なんだわ、ユウはあたしたちと全然違う。なんでもできるし、髪も目も、色が違うわ」

老人は苦笑した。

「ユウは人間だよ。あの髪と目の色は――そう、生まれたときからの病気なのだ。血が近すぎるために起こる」

「血が近いって、どういうこと？」

「マナと同じ血を持つもの。例えば、マナの母親、父親、マナの母親から産まれたマナの兄妹、マナの両親の兄妹、その子供達。これらはみんなマナと同じ血を持つ。近親者、または血族ともいう。血族同士婚姻を結ぶことで起きやすい遺伝病、これは身体のメラニンという色素が欠乏して、黒い組織をつくれなくなるというものだ。だから髪と目、肌の色が薄く赤くなってしまう」

「じゃあ、ユウのあの力は？」

「それは私にもわからん。あれもまた濃すぎる血が要因なのか」

「ドームには、ユウみたいな人はいなかったわ。血が濃すぎるというのは、いけないことなの？」

「血族結婚は古い時代からの禁忌とされてきた。不妊や障害、遺伝病など、さまざまな弊害が現われるからだ」

「ああ。わかるわ。ドームにはクローンがたくさんいるけど、クローンはみんな子供を作れないもの。それに、クローンなんて与えられたことしかできないの」

マナの無邪気な口調に密かな侮蔑が含まれていることを悟り、老人はゆっくりと首を振った。

「マナ、そんなふうに言ってはいけない」

厳しい口調に、マナはにわかに怯えた。

「おじいちゃん？」

「マナ、おまえさんは優しい子だが、知らなすぎる。この世界に生きているものは全て慈しむべきもの、慈しまれるべきものなのだ。

生命とは、そこに貴賤を見いだすものではない。みな平等に尊いものなのだ。例えそれが、自然の理に反するものであっても」

マナはまた、混乱した。そんなことを、シイナは教えなかった。クローンは、知能のレベルも高くなく、人間としても扱われていない。自分達とは違うのだと、以前自分に言ったのだ。そのことを老人に語ると、老人は小さく笑った。

「では、おまえさんは、自分とは違うユウや私を、生きる値打ちのないものだと思うのかい？」

「そんな！！　一度も考えたことないわ、そんなこと。あたしは、ユウもおじいちゃんも大好きだもの」

「では、その気持ちを他のものにも向けておあげ。誰しも、望んでそうと生まれることはできないのだよ。そして、それは誰の所為でもない。

望んだものになれなかったことを苦しむものは多い。それを蔑んではいけない。その傷を、理解しようと努めなければならないのだよ」

「ええ、そうね。ごめんなさい、おじいちゃん。あたし、いけないことを言ったわ。おじいちゃんやユウを蔑んだりするつもりはなかったのよ」

「わかっているよ、マナ。おまえさんはずっと、そう教えられてきたのだから無理もないね。ただ、これから知ってほしいのだよ。この世界に生きる全てのものの美しさと、かけがえのなさを。

この世界は、全てが愛おしい存在で満ちている。今ここにこうして立って呼吸をしていること、それだけで、私は本当に生きていることがすばらしいと思うのだよ」

「知りたいわ、あたしも」

憧憬の眼差しで、マナは老人を仰いだ。

「どうして、おじいちゃんの考えていることは、こんなにあたしと違うのかしら。あたしは、今まで呼吸することの意味を感じたことはなかった。それがどんなに大切なことなのかも。教えられなきゃ、わからないものなの？」

「そうだね。自分で気づける人もいるが、マナ、私も教えてもらっ

たんだよ。母にね」

「母――〈お母さん〉ね！！　教えて、おじいちゃん。お母さんて、どんな人？」

マナは老人の衣服の袖を握り、話をせがんだ。老人はそんなマナに優しく語りかける。「そうだなあ。とても、落ち着いていて、静かで、いつも母からはいい匂いがしていたのを憶えているよ。優しく、私をとても愛してくれた。時には厳しく、叱ってもくれた。

一度、私が――そう、おまえさんよりもまだ小さいとき、母のいいつけを破って、夜、外に出たことがあったんだよ。幸い何事もなく戻ってきたが、そのとき初めてぶたれたんだ。そして、その後彼女は私を抱きしめて泣きだした。本当に彼女は私を愛してくれた。

ああ。懐かしいね。本当に、とても、懐かしいよ。彼女に会いたい。話したいことがたくさんあるのに」

「いいわね。おじいちゃんには、お母さんがいて。あたしにはいないわ。あたしのお母さんて、どんな人だったのかしら。おじいちゃんのお母さんみたいに、優しい人だったのかしら」

「きっとそうだよ。子供を愛さない母親はいないからね」

「本当？　みんなそうなの？　あたしがおじいちゃんを好きみたいな気持ちなの？」

「そう、そして私がおまえさんとユウを思う気持ちと同じものだ」

触れた手から感じる暖かな感情に、マナは安堵した。老人は、マナを愛してくれている。それがわかるのはとても嬉しかった。

「親が子を愛するということは、自分を愛するのと似ている。自分から分かたれた一部だから、きっと切り離して考えるのは難しいのだろう。だが、それは決してそれ以上であってはならないのだ」

「それ以上って？」

「母と息子。父と娘。彼らは最も惹かれあってはならない存在だ。何故なら彼らは最も濃い血を、その身に有しているのだから」

「ああ。つまり、〈伴侶〉としてはいけないってことなんでしょう？　それに、歳も離れすぎているもの、無理があるわ」

「マナは何にでも興味をもつ。ユウ以上だ」
老人が笑う。だが、マナは当然のように頷いた。
「だって、あたしは何も知らなかったのよ。ドームで教えてくれたことも大事だけど、それはほんの少しだわ。あたしは知りたいの。もっともっと、たくさん、いろんなことを」
マナは老人の腕にぐっとしがみついた。
「おじいちゃんは好きよ。あたしに色々なこと教えてくれるもの。あたし、ここに来てよかった。そうじゃなかったら、何にも知らないまま、博士に言われるままだったかも知れないもの」
老人を見上げると、皺深い顔が静かに微笑んでいた。
「あたしね、考えてるの。まだ決められないけど、おじいちゃんの言ったこと、きちんと考えてるのよ。自分がどうしたいのか。でも、それを決めるには、あたしまだ何も知らなすぎるの。だから、決めるためにも、もっともっといろんなことを知りたいの」
驚いたことに、少しずつ、マナは人形から脱し始めていた。自己を確立し、学び始めている。その成果は恐るべき速さでなされているのだが、それにつれて、マナの心には同時に不安が芽生えていく。
「どうして博士は、あたしに何も教えてくれなかったのかしら」

14

次の日もマナは老人とともに時間を過ごしていた。ユウはいつも食事が終わると約束のように地下に姿を消す。

マナはそれを、今でもずっと不思議に思っていたのだが、やはり口にすることはなかった。それに、ユウのいない間に老人の話を聞くことが、マナにとっては楽しみになっていたからだ。

「今日は、海の話をしよう」

「うみ？」

「そう。この地球の表面の大部分を占める太古からの水だ」

「知ってるわ。塩分を多量に含んでいるんでしょ？　だから塩辛いって。青いのよね？」

「ああ。とても美しい色をしているよ。マナにも見せたいね。あの美しい海の色を」

マナを見ていながら、老人の瞳は、どこか別の――そう、マナのまだ見たことのない海を見ているのだろう。老人はマナに話して聞かせるとき、よくそんな遠い瞳をするのだ。

マナは正直、それが羨ましかった。

老人の感情を読むことはできるが、見えないものを見ることはできなかったからだ。

「初めて地を覆う濃く青い水を目のあたりにしたとき、涙が出たよ。こんなにもすばらしい光景が、あっていいものかと。

私達の住む星の、なんと美しいことか。

よせてはかえす波のさざめきが、どこまでも続く海。わたる風さえ、命の鼓動をはらんでいた。私の生涯の中で、あれほど美しいものを見ることは、きっともうないだろうなあ」

食い入るように見つめているマナに気づいて、老人はそっと笑ってマナの頭を撫でた。

「今度、ユウに連れていってもらうといい。あの子の力ならば、すぐだ」
「本当？」
「ああ。きっとマナも感動するよ。涙が出るほど、綺麗だと思うさ」
「だといいんだけど」
マナは正直言って、そのように感じられるか自信がなかった。
老人の目と自分の目は、いつもどこかが違うのだと思えてならなかった。
遠い瞳をして、そこにはないものをとても幸せそうに見る老人の目は、きっと、自分とは比べものにならないほど美しいものを感じられるのだと。
「マナ、ユウを頼むよ」
「？」
「あの子は、きっとおまえさんのためなら何でもしてくれる。どんな願いも、叶えようとするだろう。私から言うのも何だが、おまえさんを、この世界の何よりも大事に思っている。それを、忘れないでおくれ」
その言葉に、何故かマナは不安なものを感じとった。
「どうしたの、おじいちゃん？　急にそんなこと言いだして。何だかもう会えない、何処か遠くへ行くみたいに」
「おや、そんなふうに聞こえたかね？」
「ええ。嫌だわ、おじいちゃん。そんなこと冗談でも言わないで。あたしたちをおいて、何処へも行かないでね」
「どうやら、マナにいらぬ心配をさせてしまったようだ。さあ、中へ入ろう。もう日があんなに高い」
老人は杖を持ちなおし、開いているほうの手でマナの肩に触れた。その足取りが、何だかいつもより重そうに見えた。
「ああ。きっともうすぐ……」
一歩一歩、ゆっくりと前に進みながら、遠くを見つめて、老人は呟いた。

それが一体何を意味するのか、マナはまだ知らなかった。

その日に限って、老人はいつまでも部屋から出てはこなかった。
「ユウ、おじいちゃんどうしたのかしら。いつもなら、とっくに起きてくるはずなのに」
「起こしてくる。マナはここにいて」
ユウが老人の部屋へと走っていく。
マナは自分の席につき、湯気のあがる朝食を見つめていた。
しばしのち。

マナ!!

「!?」
突然、ユウの声が脳裏に響いた。触れてもいないのに伝わってくる強い感情。こんなことは初めてだ。
「ユウ!!」
いやな予感がする。マナは食堂を出、老人の部屋へ急いだ。扉は開いたままだ。中へ駆け込む。
「おじいちゃん、ユウ!!」
ユウは老人を抱き上げ、ベッドへと運んでいる途中だった。
「おじいちゃん、どうしたの?」
「倒れたんだ。マナ、薬を。いつものやつでいいから」
「ええ」
ベッドの脇に落ちていた錠剤を、マナは拾いあげた。備え付けのバスルームに行き、グラスに水を入れ、戻ってくる。
ユウは老人の背中を支えて起こしてやると、薬を口に入れてやった。グラスを口に運び、ゆっくりと傾けると、老人は静かにそれを飲んだ。
「おじいちゃん、大丈夫?」

マナが心配そうに問うと、老人は安心させるように笑った。
「……ああ、大丈夫。少し、目眩がしてね。薬を飲んだから、もう落ち着くだろう…」
だが、老人の顔は血の気が引いて、病的に白くなっている。
「何か食べないと」
「ああ、では何か温かいスープでももらえるかい？」
「ええ。すぐ温めて持ってくるから、待ってて」
マナは急いで部屋を出ていった。食堂へと向かう足音が、老人の部屋まで微かに届いていた。

「――その時が、来たの？」

老人に視線を向けずに、小さくささやきが洩れた。
立ったままのユウを見、老人は椅子に座るよう促した。
「ああ、そろそろ、いかねばならんようだ」
「おじいちゃん――」
「わしがいなくなっても大丈夫かい…？」
血の気のない渇いた指が、椅子に座ったユウのそれに重なる。ユウは取り乱したりせず、落ち着いていた。
「――大丈夫だよ。わかってたから。何も心配ない」
「そうか……」
老人は悼ましげにユウを見つめた。まるで苦痛を堪えるかのように。
「おじいちゃん？」
「――おまえは、いつも哀しみを内に閉じこめてしまう。私達は、おまえに、心をそのまま伝えるということを、教え忘れてしまったのかもしれないなあ。
でも、ここにはマナはいない。私達だけだ。心をそのまま表してもいいんだよ」
ユウが困惑したように老人を見る。

「どうしてそんなことを？」
「おまえが、とても可哀相に見えるからだよ。いつも、決して手に入らないものを求めすぎているように、とても可哀相に見える」
老人の言葉に、ユウは一瞬目を瞠り、それから痛みをこらえるように、一度ぎゅっとかたく目を閉じた。
「ユウ――」
「おじいちゃんの言うとおりだ。俺には、何も手に入らない。いつでも、俺は独りだ」
老人はかすかに首を振る。
「独りではないよ。おまえは、決して独りではない」
「――だって、おじいちゃんは逝ってしまうじゃないか。どんなに俺が頼んでも、みんな先に逝ってしまうじゃないか！！」
「ユウ――」
「いつだって、俺は独りだ。みんな俺から離れていく」
涙の伝うユウの頬を、老人は引き寄せ、横たわったままの胸に抱いた。
「ユウ。私が死んでも、おまえは独りにはならない。マナがいるよ。あの子が、おまえの傍にいてくれる」
ユウはかすかに首を振る。
「――マナだって、いなくなる」
「いいや。マナはおまえを選ぶよ。きっとずっと、マナはおまえといてくれる。私達が与えてやれなかったものを、マナが、おまえに惜しみなく与えてくれるだろう――」

マナが部屋にいても、老人は眠っていることのほうが多くなった。起きていても呼吸が荒く苦しそうに見える。
量が増える薬は、老人の体力を奪わないように深い眠りを与えてしまうのだ。
「おじいちゃん、いつになったらよくなるの？　あたし、何かでき

ない？　どうしたら苦しいのがなくなるの？」
　珍しく起きていても楽そうに見える老人に、マナは問うた。
「ありがとう、マナ。でも、これはもう治らないんだよ」
「どうして？　病気なんでしょ？　だったら原因がわかれば治せるはずだわ」
「マナ、これは病気ではないんだ。寿命なんだよ。年をとりすぎて、命がつきるんだ。死ぬんだよ、もうすぐね」
　穏やかな口調にそぐわない内容だった。
　マナはじっと老人を見つめていた。老人は横になったまま顔だけをマナに向けていた。

「――死ぬって、どういうこと…？」

　聞きたくないように、小さな声だった。わかっているのに、何だかそれはまだマナにとって理解できるものではなかった。
　生命活動が停止すること。それが死。
　知識としてはわかる。だが、それが自分にとってどのような作用を及ぼすのか、見当もつかなかった。
「もう二度とこの目を開けないということだよ。もう二度とユウやおまえさんとこんなふうには話せないということだよ。
　死とは、永遠の解放でありながら、時には残酷だ。愛しいものとの永遠の別れも、確かにそこには在るのだから」
「いや……」
　マナは首を振った。
「マナ」
「いや、そんなのいや」
　マナは老人の死という言葉をにわかに理解した。もう会えなくなるのだ。もう、話せない。この瞳が、マナがあんなに憧れた美しい思い出を遠い眼差しで見ることがなくなるのだ。それは想像でも耐えられないことだ。

「おじいちゃん、いやよ。どこにも行かないで」
涙が、マナの頬をとめどなく流れる。
「マナ、哀しんではいけない。残される者の哀しみが強いと、死んだ者は心安らかにはなれない。いつまでもそこにとどまり、安らぎの場所に向かえなくなるんだよ――」
「そんなのわからない。あたしたちをおいていくの？　ここにあたしとユウを残して逝ってしまうんでしょ？　そんなのいやだもの」
溢れる思いを止めることはできなかった。
今、老人が死を迎えようとしている。彼女の大好きな老人が、死のうとしているのだ。
「いや、いや、おじいちゃん。死んじゃいやよ。何でもするから、お願い、死なないで」
「マナ…」
「嘘でしょう、おじいちゃん。何処にもいかないで」
涙に濡れるマナの頬に、老人はそっと手を伸ばした。だが、その手は震えていた。挙げることさえ、もうやっとなのだということが、マナにさらなる恐怖を与える。
「マナ。自分が何であるのかを見極めるのだ。生きていること、今ここに在ることだけでは、意味はない。意味とは、自分が決めるもの。自分で見いだすもの。それがあれば、どんなになっても、きっと生きていることはすばらしいと思える。
私は幸せだったよ。とてもすばらしい人生だった――たくさんの仲間達と、そしておまえさんたちとすごせて、本当に、良かった」
老人の呼吸が、浅く、速くなっていく。
「おじいちゃん!?」
震える老人の手を、マナは必死で握った。少しでも震えを止めたい。そうしないと、存在がすりぬけていってしまいそうに思えた。
「マナ。おまえさんはいい子だ。本当に、いい子だ。おまえさんとユウは、私の生涯の中で、一番あざやかな色だった――」
老人は、マナの背後にじっと立ち尽くすユウを見た。

「おじいちゃん……」
「ユウ。マナを守りなさい。全ての苦しみと哀しみから、マナを守るのだ。それができれば、おまえも幸せになれる。きっと」
「おじいちゃん、でも、俺は――」
「幸せになりなさい。二人とも――」
静かに、老人は目を閉じた。
それきり、動かなかった。
「おじい、ちゃん…？」
答える声は、永遠に失われていた。

「いや……」
永い凍えた沈黙の後、マナの声がかすれて漏れた。
「いやよ、こんなのいや。おじいちゃん、目を開けてよ。ねえ、起きて。約束したじゃない。もっとたくさん、いろんな話をしてくれるって言ったじゃない！！」
「マナ」
「いやよ、いやあっ！！」
「マナ！！」
ユウがマナを強く抱きしめた。その瞬間、混乱したマナの中に、自分のものではない、もっと強く、もっと深い哀しみが入り込んできた。息がつまる、激しく、心の中だけで渦をまく感情の嵐。

こんなに深い哀しみを知らない。
こんな哀しみを、自分は持てない。

これは、ユウのものだ。
「マナ、仕方ないんだよ。おじいちゃんはもう、十分生きたんだ。人間は、いつか死ぬんだ。おじいちゃんにも、その時が来ただけなんだよ」

マナは顔をあげ、そう言うユウを見つめた。
彼は、何処か虚ろにも思えた。
マナはユウの背に手を回し、しっかりと彼を抱きしめた。
「ユウも泣きたいのね。泣いてもいいわ。一緒に、泣きましょう。そうしないと、ユウのほうが、壊れちゃうわ」
「――」
「苦しいの。これから、どうすればいいの。大好きだったのに。ずっと一緒にいたかったのに」
マナは肩に、ユウの熱を感じた。押しつけるようにマナの肩に額をあて、彼はずっと黙っていた。
それでも、ユウは泣かなかった。泣けなかった。
深く激しく、その心の内は泣き叫んでいるのがわかるのに、その感情は、決して表には出てこない。
冷たい壁に押さえつけられているように、ユウはただ黙ってマナを抱きしめていた。

15

「まだマナは見つからないの!?」
一日おきの外からの通信は、シイナにとって決して喜ばしいものではなかった。
「捜索を続けなさい。あらゆる廃墟を探すのよ。見つかるまで、帰ってくるのは許さないわ!!」
叫んで、シイナは通信を無理矢理切った。
「――」
苛立ちでおかしくなりそうだ。
捜索に向かわせたクローンは、そのほとんどが外に出たことのない者達だった。それ以外のクローンはドームを維持する重要な仕事についているため、そこを離れられない。かといって、シイナが自ら行くことは許可されない。彼女はあくまで指揮することを許可されただけ。捜索中彼女の身に何かあっては困る故に。
シイナは、このドームの全てを掌握している。全ての機能は彼女を通じて円満かつ円滑に行なわれる。カタオカは指導者ではあるが、事後報告という形で把握するのみ。その全権をシイナに任せている。彼がシイナより強い権限を持つのは、あくまで議会においてだけなのだ。
「――」
カタオカも、その他の議員も、クローン達も、シイナにとっては役に立たない厄介者にしか思えなかった。
考えることさえ放棄した人間達。受け身にしかなれない無能者。役に立たないのなら、生きている価値さえないのに。
いっそ一思いに殺してしまいたくなる。生きていなくてもかまわない。さっさと死んでくれればいいものを。
「まったく、なんてことかしら」

椅子に身体を沈み込ませながら、シイナは大きく吐息をついた。
マナとユウの捜索は、思うようにははかどらなかった。
無理もない。いくら小さな島国とはいえ、それは、他の大陸と比べてのことだ。
ドームは、島の中心よりやや南に位置している。気象すらコントロールし、苛酷すぎる環境を克服したとはいえ、無理な変動はどこかに歪みを引き起こす。穏やかにめぐる四季に対して、少しでも無理を避けようとしての対策であった。
登録上の全ての人間とクローン達が南へ下った今、北はすでに彼等にとって未知の世界であった。減少しすぎた人口と進んだ科学力のために、穀物等を育てるための広大な土地を確保せずともよくなったのだ。
打ち捨てられた建造物は廃墟と化し、各地に無残な姿を残している。多分、そのどれか一つに、ユウ達は隠れ住んでいるのだろう。
「マナ……」
マナの身が、シイナは何より心配だった。外の世界で、どんなに恐い思いをしているだろう。どんな苛酷な生活を強いられているのだろう。
考えるだけでいてもたってもいられなくなり、シイナは振り切るように部屋を出た。探しに出たい自分を押さえ、仕事に戻らなければならない。感情を静かに押さえる。足早だった彼女の歩みが、徐々に戻っていく。
緩いカーブを描く廊下から直線に移動し、エレベーターへ向かう。その時、温室を見ているフジオミの姿を捕らえた。足音に気づき、フジオミが振り返る。
「やあ」
今は、彼の存在そのものにさえ、苛立つ。
こんな男が、今もっとも価値あるものだとは。
エレベーターに乗り込むシイナに続き、フジオミが独り言のように呟く。

「議員達は、もうあきらめたほうがいいと思っているらしいね」
同時に身体にかかる浮遊感。
「あなたも同じ意見なの」
フジオミは肩を竦める。
「さあ。どうでもいいというのが僕の正直な意見だが、君が望むのなら、君の好きにすればいい」
この事態が、彼にとって実に愉快なことのように、フジオミの口調は嬉々としていた。
エレベーターが止まると同時に、ドアが開く。黙って廊下を歩きだすシイナに、背後からのフジオミの声。
「知っているかい、シイナ」
不愉快さを隠さず、シイナは応える。
「何なの？」
「その昔、この地には美しい鳥がいたそうだよ。だが、人間が自分達の利益を満たす間にその鳥は繁殖の場を奪われ、乱獲され、とうとう滅んでしまった。
自分達の愚かさに気づいた人間があらゆる努力をしても、結局それらを救うことはできなかった。滑稽なのはそのあとさ。別の大陸の全く同じ鳥を連れてきた。スペアがあるからそれで代用しようとした」
歩みを止めて、シイナは振り返った。
フジオミはかすかに微笑っていた。
「何が言いたいの」
「いいや。ただ、人間の愚かさはどんなに時を経ても変わらないものなのかと思ってね」
肩を竦めるフジオミを、シイナは苛立たしげに睨んだ。
「私の行為が愚かだと言いたいの」
「耳に痛い真実は素直に聞けないものさ。僕が何を言っても君の耳には冗談としか聞こえないようにね」
シイナの手が上がった。その手は鋭く風を切り、フジオミの頬を

打った。
「――いきなり、それはないんじゃないか」
あくまで彼は冷静に問う。それがシイナをより怒らせることを知っていながら。
「人類は滅びないわ。フジオミ、あなたには選ばれた者としての自覚が足りないようね。くだらないおしゃべりに時間をつぶす暇があるのなら、マナの心配でもすればいいわ」
「マナ、マナ。君の口から出る言葉はその名だけだな。まるで恋しているみたいだ」
フジオミが息をつく。
「君自身の望みは？　君が君のために望むことは、何もないのか」
「私の望みは、マナが叶えてくれる。それこそが望みよ。そのためには、何を犠牲にしてもいい」
「じゃあ、僕の意志も？　マナを愛していなくても、それが義務だと」
「ええ。そうよ。あなたとカタオカだって、私に義務を強いたじゃない。私はあなたを愛してもいない。それでもあなたは抱いたわ。同じ気持ちで、マナも抱けばいい。
大いなる目的の前には、個人の些細な感情など、意味を持たない。あなたとカタオカが私にそれを教えた。あなたには責任がある。義務がある。特別な人間なのよ。それを、もっと自覚して行動しなさい」
「だがそれは、僕が望んだわけじゃない。君が望んで、そう生まれたのでもないように」
冷徹とも思えるフジオミの声。
その言葉の無責任さを、彼は自覚していなかった。
そしてそれが、どれほどシイナを傷つけるのかも。

「今まで散々その恩恵に浸かってきたくせに、今更勝手なことを言わないで！！」

堪えきれずに、シイナは叫んだ。

「あなたはマナとの間に子供をつくるのよ。それがあなたの義務だわ。私は私の義務を果たしている。あなたもあなたの義務を果たしなさい。それができないのなら、今後私に指一本触れないで！！」

感情の高ぶりを押さえきれずに、シイナは不覚にも溢れた涙にさえ気づかなかった。

気づいたのは、フジオミが意外にも、彼女がかつて一度だけ眼にしたことのある表情を、その顔に見せたからだ。

あの、悪夢のような夜の中で――

いやっ、フジオミやめてやめて、もういやあ！！

二の腕を押さえつける確かな痛み。

どんなに泣いて叫んでも、彼は繋いだ身体を離してはくれなかった。引き裂かれるような痛みと恐怖しかなかった。あまりの恐怖と苦痛に、彼女は自ら意識を手放した。目を覚ました時には覚めてくれる悪い夢だと祈りながら。

だが、目を覚ましても始まるのは悪夢の続きだけ。全てが終わった後も残る身体の奥の鈍い痛みを感じて、シイナは無言で涙を流し続けた。

シイナ。

ためらいがちにかかる声。

虚ろな瞳で見返すシイナには、おぼろげなフジオミが映る。

まるで、大切にしていたものを自らの過ちで失ったような、どう

しようもない後悔とよく似たやるせない感情が、瞳から伝わる。

それは、壊れてしまった二人の関係を、もしかしたら彼も悔やんでいたのかもしれないと、一瞬だけシイナに思わせる表情だった。

めまぐるしく甦る忌まわしい過去に、シイナの身体が拒絶反応を示した。

嘔吐感と激しい震えに身体が支えを失い、膝が崩れる。

「シイナ！？」

驚いたフジオミがとっさに腕を伸ばし、シイナを支えようとする。

「私に、触らないで！！」

鋭い眼差しで、シイナはフジオミの手を拒んだ。

「――」

「言ったはずよ。義務を果たす気がないのなら、私に触れるのは許さない。

さあ、消えて。その姿を私に見せないで。これ以上、私を不愉快にさせないでっ！！」

伸ばした手を、しばしさまよわせ、フジオミは引いた。

視線が絡み合い、わずかな沈黙の後、フジオミは無言で背後のエレベーターに乗った。シイナは壁に寄り掛かり、しばし泣いた。

16

空が、心なしか高くなっているように思えた。
気がつけば、雲は以前よりずっと高い位置に浮かんでいた。
老人の遺体は、清潔な布に包まれ、外に運びだされた。
墓所に埋めるのだと、マナはユウから聞いていた。
老人の墓は、あの、白い花の咲く墓の隣だった。
前の日からすでに掘られていた穴に、ユウは静かに老人の身体を横たえた。ゆっくり静かに、土がかけられていく。
「おじいちゃん、苦しくないの？」
虚ろなマナの声に、ユウもまた、虚ろに答える。
「マナ、これはもうおじいちゃんじゃないよ」
感情のない呟き。
ひどく乾いた答えに、不意にマナは意識をはっきりとユウに向けた。
ユウは黙って土をかけていた。
その眼差しさえも虚ろだった。心は、何処にもなかった。
「ユウ――」
「おじいちゃんだったものは、もうこの身体の中にいない。俺達が会いたいおじいちゃんは、もう何処にもいないんだ」
ユウの心は、傷つき、痛み、壊れかけていた。
いつもそうだったのだ。
だが、それを押さえつけているから、いつまでも癒されることがない。
今はっきりと、マナは理解した。
（いけない。ユウを傷ついたままにしておいてはいけない）

痛烈に、そう思った。
「違うわ、ユウ。そんなことない。おじいちゃんはいるわ。この世界の何処か、死んだ人がみんな行く場所で、ちゃんとあたしたちのことを見ていてくれてる」
機械的に作業を続けるユウの腕を、マナは捕まえて止めた。
そうして、自分の方を向かせた。
作業を止められても、ユウは動かなかった。
こんなユウを見たくなかった。
ユウを呼び戻したかった。
老人の死とともに失われようとする、ユウの本質を。
虚ろな眼差しは決してマナを捕らえてはいなかったが、それでも、マナは言う。
「ねえ、ユウ。おじいちゃんは言ったわ。死んでも終わりじゃないって。おじいちゃんは解放されたのよ。痛みも哀しみも苦しみもない彼方へ、みんなが待ってる場所へ、行くことができたのよ」
真摯なマナの言葉に、ユウは虚ろな眼差しをゆっくりと向け始める。
「おじいちゃんはいるの。あたしたちがいつか死んだら行ける場所で、待ってる。あたしたちは、そこでまた会えるの」
「また、会える――？」
「ええ。会えるわ」
「――そこには、みんながいるんだ」
「ええ、そうよ」
マナも、本当にそんな場所があるのかはわからなかった。
けれど、信じたかった。
そして何より、この目の前の傷ついた可哀相な魂を少しでも癒したかった。
「そうよ。痛みも苦しみもない場所で、みんな幸せなの」
「だから、『哀しんではいけない。哀しみが強いと、死んだ者は心安らかにはなれない。いつまでもそこにとどまり、安らぎの場所に

向かえなくなる』――」

虚ろなユウの声。

「――でも、マナ。俺は　哀しいんだ」

不意に、静かな呟きがこぼれた。

「ユウ――」

「魂だけでもいい。どんな姿でもいい。ここに、いてほしかった。哀しすぎて、どうにもならないんだ。どうして、俺はいつも――」

そっと、マナはユウの頬を引き寄せ、抱きしめた。温もりを、伝えるように。

「俺がおじいちゃん達と暮らし始めた時は、もっとたくさんいた。みんな優しかった。とても楽しかった。大好きだった。でも、みんな死んでしまったよ、俺をおいて。おじいちゃんも死んでしまった。もう誰も、いなくなった」

マナには、ユウの哀しみがわかった。彼を愛しただろう人達の愛、彼が愛しただろう人達への愛が、痛いほどわかった。

「あたしがいるわ。ユウ」

哀しまないでとは、言えなかった。

自分はユウより長く老人とすごしたわけではなかった。それでも、その死は心に深い哀しみを残した。愛した人達が自分をおいて死んでしまうのを常に見届けねばならない哀しみと苦しみは、一体どれほどの傷を、彼の心に刻みつけたのだろう。

「あたしが、あなたの傍にいる」

「マナ、あんただけは、俺より先に死なないでくれ。俺はもう、おいていかれるのはいやだ――」

「ええ。約束するわ。あたしは決して、あなたより先には死なない」

ユウの身体は震えていた。

安心させるように、マナはいつまでもユウの身体を抱きしめていた。

ユウは眠らなくなった。
眠れなくなったというほうが、正しいかもしれない。そして、マナの傍を離れなくなった。まるで、目を離したらもう二度と会えなくなるかとでも言うように。
大丈夫だとマナが何度言っても、ユウは親の後を追う雛鳥のように離れない。
マナは不安だった。傍にいるのがいやなのではない。眠らないユウが、日に日にやつれていくのがわかるからだ。だが、マナは自分がユウのために何をすればいいのか、わからなかった。
そうして、一週間が過ぎたある朝、ユウは倒れた。
「ユウ！？」
かけよったマナは、ユウの顔に手をやった。呼吸はしている。生きている。
「よかった、死んじゃってない…」
きっと身体が限界を訴えたのだろう。ユウは意識を失っていた。眠っているのだ。
マナの力ではユウをベッドまで運ぶことはできなかった。ユウの部屋に行って枕と掛布を取ってくる。
意識を失っていても、ちっともユウは楽そうに見えなかった。眠りが浅いのか、身体が何度も痙攣する。白い肌は、死ぬ間際の老人を思わせた。
頭の下に枕を入れ、掛布で身体を覆う。
（ユウも、おじいちゃんみたいに…）
そう考えただけで泣きたくなる。
マナは老人に会いたかった。彼なら、きっとユウを救けてくれるのに。
人は何度でも生まれ変わって、何度でも地上に甦るのだと、老人は言った。
「でも、そんなに待てないわ。いつになるのかも、それがおじいちゃんなのかも、わからないわよ……」

今、会いたいのだ。
戻ってきてほしいのだ。
「淋しいわ、おじいちゃん。ユウもあたしから離れていったら、どうすればいいの？　あたしも待ってればおじいちゃんのところに行ける？」
口に出してから、突然それが一番いいことのようにも思えた。
老人が戻ってきてくれないのなら、自分達が老人のところへ行けばいいのだ。
そこには老人が言ったように、きっとみんながいるのだろう。
ユウが失ってしまった、たくさんの愛しい人達が。
そこに行けば、ユウも自分も、淋しくはないだろう。

信じられないだろうが、昔この地にはたくさんの人がいたんだよ。たくさんの車が行き交い、夜には星よりも輝く光が地上を照らした。その時、きっと人間はこの世界で自分達にできないことはないだろうと思っていたに違いない。
この世界に比べれば、人はとても無力なものだ。だが、彼等はそれにとうとう気づかなかった。気づかないまま、過去において過ちを犯し、未来において償いを求める。
この美しい世界の中で、人間だけが、醜いのだよ。なぜなら、人間だけが〈産み〉の力を軽んじるからだ。生命を軽んじ、冒涜し続ける。その愚かな行為の結果が、今のこの世界なのだ。
いずれこの地上に、人間はただの一人もいなくなる。人だけがいないこの地上は、きっと永遠に近い時を過ごすだろう。全ての風が地上を優しく通り抜け、そこには私達が決して得られなかった全ての静穏がある。
目に浮かぶようだよ。その光景が。
それがきっと、この世界で最も美しい光景になるだろう――
きっとこの地上ではない別の場所に、みんな行くから、いなくな

るのだ。
「でも、今は駄目よ。おじいちゃん、ユウを連れていかないで。行くなら、二人で行くから、ユウだけ連れていかないで」
びくんと、ユウの身体が跳ねた。
「……？」
目を覚ます。自分を覗き込んでいるマナの顔を視界に捕らえ、些か驚いているようだった。
「ユウ…」
「マナ――どうして、俺、何で…？」
「倒れたのよ。よかった、おじいちゃんみたいに死んじゃうかと…」
それが限界だった。
「マナ？」
マナの大きな瞳から、見る間に涙があふれる。マナがユウにぎゅっとしがみつく。
「マナ、ごめん。心配かけたね」
「あたしをおいていっちゃいや。ユウもおじいちゃんみたいにあたしをおいていくのかと思ったわ」
「行かないよ。マナをおいて、どこにも行かない」
「行くんなら、二人で行かなくちゃ。一緒に行かなくちゃいやよ」
マナは涙に濡れた顔を上げて言う。
ユウはなぜか強ばった顔でマナを見下ろしていた。
「俺と、一緒に――？」
「ええ。二人ならどこにでも行けるわ。おじいちゃんも言ってたもの。ユウは、どこにでも連れていってくれるって」
ユウは、何か考えているようにも見えた。瞳には、何か強い意志が感じられた。
「マナ、本当に俺と一緒にいく気がある？」
「ええ」
「後悔、しない？」
「しないわ。だって、ユウと一緒におじいちゃんのところに行くん

だもの」
　ごくりと、彼の喉が鳴った。
　何かをためらっているようにも見えた。
「じゃあ、目を閉じて…」
　言われるままに、マナは目を閉じる。
「少し、苦しいかもしれない――」
「少しでしょ。いいわ」
　首筋にかかる指は、なぜか震えていた。
　だが、苦しいと思える時は来なかった。ただ震える指がマナの首筋にかけられたまま、混乱したような感情が伝わってくるだけだ。
　不意に、ユウの手が離れた。
「ユウ？」
　目を開けて、マナは驚いた。
　ユウが泣いているのだ。
「ユウ、どうしたの？」
　ユウは首を横に何度も振った。
「ごめん、マナ……」
「どうして泣くの、ユウ？」
「……マナが望むなら、どこにでも連れていく。何でもしてやる。でも、おじいちゃんのところへは、連れていけない…」
「ユウ――」
　激しい後悔と、それによる苦痛が、ユウの内に感じられた。
「今は駄目だよ。今はまだ、その時じゃない　俺には、できない……」
　両手で顔を覆って泣くユウを、マナは抱きしめる。
「ユウ、泣かないで。今じゃなくてもいいのよ。いつでもいいわ。いつか、二人で行きましょう。一緒に行くのよ。ね？」
「ごめん、マナ。ごめんなさい、おじいちゃん……」
　マナにしがみついて、声をあげて泣くユウが、なぜそうするのかマナにはよくわからなかった。だが、泣きたいだけ泣いたら、きっ

とユウは前のように戻れると、それだけは思えた。
かなりの時間が流れ、いつしかユウの嗚咽が途切れ、感情の波が穏やかになっても、二人はただじっと、互いを支え合うように離れなかった。ぬくもりが服越しに伝わるのが心地よかった。

「ユウ、海が見たいわ」

唐突にマナが言った。
「マナ？」
「おじいちゃんが言ってた。海が見たかったって。あたしも見たいわ。おじいちゃんが見たがってた海を。海なら、いい？」
肩ごしに、ユウは笑った。
「ああ、いいよ」
マナは体を離して、ユウを見つめた。
もうユウの感情は穏やかだった。
それどころか、いつもより大人びてさえ見えた。
大丈夫。
そう思った。
だが、思わぬ事態がこれから起こることを、二人はまだ知らなかった。

「シイナ！！」
管理区域のヘリポートへ向かう途中の彼女を呼び止める声。
もちろん、フジオミだ。
「何の用？」
うんざりした口調で振り返るシイナ。
「さっきのコールは？　何かあったのか？」
「マナの居場所がわかったわ。捜索隊のレーダーに確かな生体反応があったそうよ」

それだけ言うと、シイナは、また歩きだした。が、その横に、フジオミが並ぶ。
「僕も行こう」
「何ですってっ！！」
あからさまに非難の眼を向けるシイナに、フジオミは一向に頓着しない。
「近い未来の〈妻〉を、救いにいって何が悪い？」
口調には、揶揄するような響きが残っていた。
「――私の邪魔をしたら許さないわよ」
「仰せのままに」

17

俺がいいって言うまで、目を閉じていて。

ユウの言葉を守って、マナはじっと目を閉じていた。

「ユウ、もういい？」

「まだだよ。少し歩くから。絶対目を開けちゃ駄目だよ」

風に重なる、聞いたことのない音。

踏みだした足は不意に沈んだ。ざらついた感触がする。滑るような、柔らかな感覚。踏みしめるたびにサクサクと音がした。いつもの土の硬い感触とは違う。

「ユウ、土が軟らかい。変だわ」

「土じゃないよ。砂だよ」

「すな？」

「そう。海の近くに多くある。草がほとんど育たない乾いた細かい粒」

両手をひかれて、恐々とマナは歩いた。

風は湿っているように思えた。

今まで嗅いだことのないにおいがする。

マナの知らない音は前へ進むごとに徐々に近づいてくる。ますますきつく目をつぶった。

「ユウ、恐いわ。この音は何？」

「見ればわかるよ。さあ、目を開けて」

ユウが目の前からよける気配がした。

「もういいの？」

「ああ。海だ――」

マナは静かに目を開けた。

そうして、目の前に広がる海原を、初めてその瞳に映した。

「――」

水だ。

見渡すかぎりの青い水だ。

これは海。

群青の水の中、白く寄せては返す、これは波だ。老人の言葉が、マナの視界に映るものとぴったりと重なる。

「これが、海――？」

「ああ。そうだよ」

海の向こうは雲に一直線に遮られていた。それがかえって、この地上が実は球体であるということをマナに認識させた。平らに見える水平線は、大きな球の一部に過ぎないのだと。ただ、大きすぎるだけで誰もそれに気づかないのだと。

潮騒が、全てをかき消していく。

なんて、世界は美しさに満ち溢れていることか。

知らず知らず、涙が溢れた。

「マナ、どうかしたのか？」

頬を伝う涙に気づいて、ユウが問う。

「ううん。違うの――」

マナは涙を拭おうとはしなかった。ただじっと、海を見ていた。

「おじいちゃんの言ってたこと、本当だった……」

初めて地を覆う濃く青い水を目のあたりにしたとき、涙が出たよ。

こんなにもすばらしい光景が、あっていいものかと。

私達の住む星の、なんと美しいことか。

よせてはかえす波のさざめきが、どこまでも続く海。わたる風さえ、命の鼓動をはらんでいた。

今マナの眼前に広がる海は、老人の心と同調したような感慨を彼女に与えた。

なんて、美しい。

言葉にできない、こんなものが自分の中にあるなど、マナは今まで知らなかった。

溢れる涙を止めることができない。

これが、海。

濃い青に染められた、まるで意志を持つかのようにさざめく、これが海なのだ。

人という存在のなんと矮小なことか。この偉大な世界の中のほんの一部分にしかすぎない。

これは全ての命の母。

全ての命を継ぐ存在。

「――」

全てが、愛しかった。

この世界にある全てのもの、生きている全てが愛しかった。

ここで、こうして風に触れていること。海を見ていること。生きて、感じていることが、愛しかった。

「ユウ、すごいわ。すばらしいわ。こんなに綺麗な所に、あたし達、住んでたのね。今まで知らなかったの悔しいくらいよ。ドームの中にずっといて、こんな綺麗なものを見たことがなかっただなんて、馬鹿みたい。本当に、馬鹿みたいだわ」

マナは泣きながら、ユウに抱きついた。

「綺麗ね。本当に、なんて綺麗なのかしら。ここから、生命が産まれたのね。ここから始まって、あたし達、ここにいるのね」

老人が夢見るように語った美しい世界が、確かにそこに在った。

「音がする」
不意に空を見上げ、ユウは呟いた。
「波の音だけよ。何も聞こえないわ」
「いいや。何か来る。あれは――」
ユウはじっと空を見つめたまま動かなかった。マナもユウの視線の先へ目をこらした。
「――」
やがて雲の切れ間に、小さな黒い影が見えた。波の音に重なる、マナには耳慣れない機械音。
「あれ、何？」
「旧式の軍用ヘリだ。空を移動するものだ。乗ってるのは、三、人？」
「ユウ――？」
マナはユウの腕に触れる。
次の瞬間。
「あいつだ――」
凄まじい殺気を、マナはユウから感じた。憎しみの全てが、上空のヘリに向けられている。当然のように彼女は悟った。あの中に、シイナがいる！！
「マナ、隠れてろ」
刺すような緊張感。能力が発現する。ユウの身体が宙に浮いた。
「今度こそ、殺してやる！！」
手が離れる。彼はシイナを殺す気なのだ。
「待って、ユウ。だめよ、行かないで！！」
マナの叫びも、もうユウには届いていなかった。

18

木陰に消える小さな姿を追って、シイナは歓喜の声をあげた。
「マナだわ！！」
「シイナ、危ない！」
フジオミはシイナの腕を捕らえたまま、自分も下を見下ろした。
そして見る。
地上から真っ直ぐにこちらへと向かってくる、白銀の髪と、赤い瞳の少年の姿を。
「ユウ！？」
見つけたシイナの反応も速かった。操縦席へ急ぎ、叫ぶ。
「銃をかしなさい！！」
「シイナ、何を――」
振り返るフジオミは銃を手に立つシイナを見た。
「殺してやるわ。今度こそ」
銃を構え、開いた扉の向こうを、シイナは凝視していた。
「――」
上空に静止したままの機体の高さに、ユウはいた。怒りに満ちた瞳が、シイナだけを見据えている。対するシイナは、能面のような無感動な表情で、銃口を向けたままユウを見た。
二人の視線が、完璧に重なる。どちらも決して、相手から目を逸らさない。一瞬でも逸らしたらやられると、本能で悟っていたのかもしれない。
「どうして死ななかったの」
「！！」
そんな小さなささやきを、ユウだけが聞いた。

そしてそれが、あらゆるものの緊張感をやぶった。
「シイナ、止め――！！」
フジオミは、シイナの肩の震えで、トリガーを引こうとしていることをその瞬間、感じた。
とっさに触れた手から、衝撃が伝わる。
同時に、ユウの身体は糸が切れた人形が倒れるように唐突に視界から消えた。
「殺したのか！？」
蒼白となってフジオミが問うた。
「失敗よ。手応えがなかった」
対するシイナは冷静だ。
苛立たしげにフジオミの手を振り払う。
邪魔をされて狙いが狂ったのだ。絶好の機会だったというのに。
「今度邪魔をしたらあなたでも撃つわよ、フジオミ」
言いながら、風が吹き付ける開いた扉から下を覗いたシイナは身を強ばらせた。
すぐ下に、ユウがいたのだ。
「！！」
シイナはもう一度、今度は片手で銃を構えた。
「シイナ！！」
ユウの鋭い叫びとともに機体が傾いた。シイナが足元をすくわれる。
「！？」
シイナの身体が、一瞬空に浮いた。そのまま重力に引かれる
「シイナ！！」
とっさにフジオミはシイナの手を引いて中へ引き戻す。
次の瞬間、激しい衝撃が機体を襲った。
「きゃあ！！」
シイナは床に叩きつけられた。
「！！」

フジオミがバランスを崩す。扉脇の手摺りを掴んでいた彼の手が、離れる。
「うわっ！！」
彼の姿が、シイナの視界から消える。
「フジオミ！！」
シイナが外へ身を乗り出す。どこにも、その姿はない。
ただ、黒い塊が青い海目指して小さくなっていくのが見えるのみ。
シイナの全身から血の気が退いていく。
「フジオミ――――っ！！」
叫びが、大気を切り裂く。
そして、マナも、その光景を見ていた。
扉から飛ばされるフジオミの姿。遥か下は海。あの高さから落ちたのなら、救からない。
「いや…」
マナが叫んだ。
「いや、救けて、ユウー！！　フジオミを救けて！！　お願い、死なせないでー！！」
「！！」
その絶叫は、ユウの耳にはっきりと届いた。すぐに動いた。
フジオミを追って、ユウの姿が海へと向かう。
二人の距離が見る間に縮まる。ユウが手をのばす。フジオミの腕を、掴んだ！！
「ユウーっ！！」
マナの叫びとともに、激しい水音。飛沫が何度も海面を打った。
マナはユウがフジオミを捕まえたとき、ほんの一瞬、落下の速度が揺るまったようにも見えた。
「ユウ…？」
だが、二人の姿は見えない。
マナはじっと待ったが、海はやがて落ち着きを取り戻し、波だけが穏やかにさざめいている。

二人の姿は、見えない。
「いや…」
膝の震えを、マナは止められなかった。
心底恐怖した。フジオミが死ねば、全てが終わる。
「博士、おじいちゃん　救けて、どうしたらいいの。もし、フジオミが死んでしまったら、人が、終わるのよ……」

マナ！！

突然マナは強い思念を感じ、振り返った。
林の影、川と海が交わる場所に、ずぶぬれの人影が見えた。
声を出さずにマナに手招きをしている。
ユウだ！！
「――」
マナはとっさに上を見た。
ヘリの位置からすれば自分の姿も、ユウの姿も見えないはずだ。
そっとヘリの視界に入らないよう、マナはユウのもとへと急いだ。
「ユウっ、フジオミは！！」
「――気を失ってたから、水は飲んでない。少し休めば目を覚ます。それより、すぐにここから離れよう」
マナを引き寄せ、その腕に捕らえる。
「濡れてるから少し気持ち悪いけど、我慢してくれ」
「待って、ユウ、フジオミはどうするの？」
「おいていく。当たり前だろう」
マナはもう一度フジオミに視線を戻す。
「そんなの駄目よ。お願い、彼も連れていって」
「マナ、こいつならドームの連中が見つけてくれるさ。気を失ってるだけだ」
「見つけてもらえなかったらどうするの？　このまま目を覚まさないことだってあるかもしれないわ。死んじゃうかもしれないわ。そ

んなのいやよ。それに、彼にはどうしても聞きたいことがあるの。お願い」

潤んだ瞳で訴えられると、ユウは弱い。

「目を覚まして無事なことがわかれば気が済むのか？」

「ええ。それからドームに帰せばいいわ。お願い、ユウ」

「――わかったよ」

ユウは吐息をついてマナから身体を離した。横たわるフジオミを抱きあげる。

「三人を連れて跳ぶのは自信がないけど、今の俺は二度跳ぶなんてことはできない。マナ、俺から離れるな。手が離れたらどうなるかなんて、俺にもわからないから」

「わかったわ――」

ユウの腕にしっかりと自身のそれを絡ませながら、マナは己れを恥じた。危険を顧みずにフジオミを救ってくれた彼よりも、自分はフジオミを心配していたのだ。

人類を滅亡から救うというその崇高な使命が、彼女自身気づかなかったほど深く自分を縛っていることに驚愕した。

それ以外の全てを排除するように。

それだけを優先するように。

いつも、そう言われてきたのだ。

それまでは何の違和感もなく受けとめてきた言葉を、今マナは初めて疑問に思った。

（じゃあ、排除されたものはどうなるの？）

ただ一つの大切なもののために、他を切り捨ててもいいのか。

それは真に正しいことなのか。

フジオミを救うためなら、ユウが犠牲になってもいいのか。

マナの内に芽生えた疑問は、徐々に彼女の心に侵食していく。

聞かなければならない。フジオミに。この疑問の全ての答えを。

「行くよ、マナ」
ユウの声に、マナはきつく瞳を閉じた。
彼女はまだ信じていた。
子供である自分の疑問の正しい答は、老人がそうであったように、大人であるフジオミが知っているのだと。

廃墟に帰ったマナとユウは、すぐにフジオミをユウの部屋へと移した。すぐに使える部屋はユウとマナの部屋の他は老人のしかなかったのだが、そこを使うことをユウは許さなかった。
今日のところはフジオミにはユウの部屋を与え、ユウは老人の部屋を使うということで、その場は収まった。
ユウは意識のないフジオミの上着を脱がせると、それを壁に掛けた。マナの服と同じで特殊加工されているので、濡れても水を弾く。これならば表面の水分が乾けばすぐに着られる。替えの服は必要ないだろう。
呼吸は穏やかだが、ショックが強かったらしい。
頬を叩いても起きる気配はなかった。この分では明日になるまで目を覚まさないだろう。
ベッドに寝かせると、すぐにユウは濡れた服を変え、部屋を出た。斜め向かいのマナの部屋に向かう。
「マナ。入っていいか」
返事よりも先に、扉は開いた。
「ユウ、どうだった?」
「――心配ない。明日になれば目を覚ます。今はまだ、無理だ」
「そう――ああ、ごめんなさい。こんな所で立たせたままにして。入って、ユウ」
ユウの手を引くと、マナは扉を閉じた。ユウはその手慣れた仕草に声をたてずに微笑った。
「? 何がおかしいの?」

「マナも、ここの生活になれたと思ってさ」
マナはさっと顔を赤らめた。
「ユウの意地悪！！」
来たばかりのときには、マナは自分で扉を開けるということを知らなかった。いつでも、自動で開いてくれるものと思い込み、じっと立ったままのときもあったのだ。
「ごめん、ごめん。マ――」
「ユウ！！」
突然、ユウの膝が崩れた。とっさにマナは腕を伸ばしユウを捕まえたが、支えきれなかった。そのまましゃがみこむ。
「どうしたの、ユウ！？」
「ごめん、少し、疲れただけ」
ユウの顔色が悪いことに、マナはその時初めて気づいた。
「ああ、どうしよう。あたしのせいだわ。ごめんなさい、ユウ。あたしが無理なお願いをしたから」
「いいよ。マナだから。どんな無理でも、聞いてやる」
かすかに微笑んだユウに、マナの胸が熱くなる。
「じゃあ、あたしがユウの願いを叶えるわ。言って。どうしてほしい？」
「ああ。このまま、少し、休ませて…」
ユウはそのまま、マナに身体を預けた。マナの背が、ユウの重みで壁に触れる。労わるように、マナはその背をなでた。
天井の明かりを避けるように片手で目を隠し、ユウはそのまま動かなくなった。
どのくらいそうしていたのだろう。
「マナ。シイナは言ったよ」
小さく、ユウは呟いた。
「？」

「『どうして死ななかったの』って。憎しみでも憐れみでもなく、俺にそう言ったよ。あの人は可哀相な人だ。ただ一つのこと以外、心を占めない。それ以外何もない。全て切り捨ててる」

静かに床に手をついて、ユウは体を離した。

じっとマナを見据えるユウの眼差しは、哀しみをたたえていた。

「俺はどうすればよかったんだろう。シイナの望むものになれなかったのが、いけなかったのか。

俺はシイナが好きだった。マナと同じように、彼女が本当に好きだったんだ」

「ユウ」

とっさに、マナはユウを抱きしめた。彼が泣きたいのが、わかったから。

憎むことで、彼は生きてきたのだ。

今はもう、ユウの心に憎しみはなかった。

あったとしても、それは微妙に形を変えていた。

ユウが憐れだった。痛みしかない、彼の心が。

なぜこんなにも、彼は傷つかなければならないのだろう。

どうしてもっと、全てが彼に優しく在れないのだろう。

「ユウ、大丈夫よ。泣かないで。もう忘れるの。あたしが傍にいるから。もう誰も、憎まないで」

何でも知っていて、何でもできるはずのユウは、時折子供のように愛おしい。

だから、マナは気のすむまでユウを優しく抱きしめていた。

せめて自分だけは、彼に痛みを与えることがないように。

19

光を感じて、フジオミはゆっくりと目を開けた。逆光の中、長い髪が陽に透けている。

「…ナ…」

かすれた声がもれた。

「フジオミ！！」

あたたかい滴が、頬に落ちた。それがマナの涙だとわかるまで数秒要した。

「…マ、ナ、僕は、生きてるのか……」

「ええ。生きてるわ。よかった――」

マナの頬から涙がこぼれ落ちる。フジオミの指が、マナの涙をすくいあげた。指が、あたたかさと同時に現実感を身体に伝える。

「泣かなくてもいい、マナ」

ゆっくりと、フジオミは身体を起こした。痛みはどこにもない。かすかな嘔吐感に眉根を寄せる。が、軽く頭を振って感覚を追い払う。ようやく、周囲が視界に入ってきた。

「――」

身体には、洗いざらしの掛布がかけてあった。身を動かすたびにぎしぎしときしむスプリングベッド。彼の知らない微かな黴臭さが鼻につく。天井と壁は壁紙で覆われてはいるが薄汚れていた。荒廃をとどめるためにコーティングはされているが、今にも崩れそうなコンクリートの建造物。いずれも骨董品とも言える代物だ。

「ここは――」

「廃墟よ。あなた、海に落ちてからずっと目を覚まさないから、ここまで運んだの」

視線をさまよわせ、フジオミはマナの背後にユウを見つけた。

「――」

マナが気づいて声をかける。
「彼がユウよ。あなたを救けて、運んでくれたの」
フジオミは、じっとユウを凝視した。
見れば見るほど不可思議な赤い瞳に、銀色に輝く髪。まるで別の地からやってきた異種族のような違和感。
「ああ　知っている。〈ユウ〉だね」
ユウは、そんなフジオミの視線を鋭い眼差しで受けとめている。
それから、不機嫌そうに目を逸らした。
「マナ。外に出てくる」
答えも待たずに、ユウは出ていった。マナは不思議そうにユウの消えたドアを見つめている。
「――嫌われたみたいだね」
笑いながらそういうフジオミに、マナは更に腑に落ちない表情をする。
「どうしてユウがフジオミを嫌うの？　会ったばかりなのに」
「彼はもう大人の男だからね。天敵というものは、見ただけでわかるのさ」
フジオミはベッドから出ると、窓へと向かった。剥出しのガラスの向こうには、荒廃の名残をとどめた風景が広がっている。
「ここは一体どこらへんなんだ？　このぐらいの廃墟なら相当大きな都市だったはずだ。ここは、あの海からそんなに離れていないのか？」
「わからないわ。ユウがあたしたちを連れてきたんだもの。あれだと近いのか遠いのかなんて全然わからないのよ」
「彼が連れてきたって、歩いて運んだんじゃないのか？」
「いいえ」
「じゃあ、どうやって？」
「跳んだのよ」
「とんだ？」
「ユウはそう言ってるの。ユウにしかできないわ。思うだけで好き

な所に行くのよ」
「まさか、瞬間移動を!?」
「シュンカンイドウ？　そういう名前なの？じゃあ、ユウに教えるわ」
無邪気に、マナは言った。だが、フジオミはマナほど寛容にその事実を受け入れられはしなかった。
超能力は研究としてはだいぶ前の時代にもてはやされたものだが、それも被験者がなくてはならない。人口が減少をたどる一方となってからは、対象となる人材はほとんどいなかった。研究は下火となり、それまでの研究結果と仮説だけが残った。
「そうか、シイナの言っていた特殊能力とはそれか…」
考え込むフジオミを、マナはずっと凝視していた。
「ねえ、フジオミ」
「あ、ああ、何だい、マナ？」
「あたし、あなたに聞きたかったの。あなたなら知ってるんじゃないかと思って」
「何をだい？」
戸惑うようなそぶりを、マナは一瞬だけ見せ、けれど思い切って尋ねる。
「博士は、小さなユウを殺そうとしたの？」
真っすぐに、マナはフジオミを見つめた。彼のどんな微妙な変化も見逃すまいとするかのような真摯な眼差しで。
「――」
だが、フジオミは顔色一つ変えなかった。だから、内心の動揺は微塵もマナには悟れなかった。それでも、彼女は再び問う。
「教えて、フジオミ。あたし知りたいの」
「それを知ってどうする？」
フジオミの声は意外なほど穏やかだった。何の違和感もなくマナから視線を外し、外の風景を見やる。
「それが事実なら、君はシイナを憎むかい？　君に見せている面だ

けが、彼女じゃない。君の考えているシイナと違ったら、君はもうシイナを好きじゃなくなるのかい？」

「――」

振り返ったフジオミの言葉が、逆にマナに問いを投げかける。答えを知ってどうするのかと。

だが、どうもできない。できるはずもない。時を戻すことも、ユウの心に刻み込まれた傷を消すことも、かといってシイナを裁くことも、何も、マナにはできない。自分にできることは、ただ事実を知ることだけだ。

マナはシイナが好きだった。自分を育ててくれたのは彼女だったし、一番歳も近く、何でも話せる女性だった。

今、彼女がユウを殺すというなら、自分は彼女を許せないだろう。だが、今ユウは生きている。生きて、マナとここにいる。それが、マナだけの真実だ。

彼女は顔をあげ、フジオミに告げる。

「もしそれが本当なら、とても哀しいと思う。だって、あたしは二人ともとても大好きだもの」

比べられないほど、今はシイナもユウも大事だった。

「でも、博士はあたしにひどいことなんかしなかったわ。いつも、博士は優しかった。あたしはやっぱり博士を嫌いにはなれない」

毅然と言い切るマナを、フジオミは驚いたように見つめていた。

「――まいったな。僕は君を見縊っていたようだ」

何も考えていない、愚かな子供だと思っていた。

実際、シイナはそう育てていた。ただ優しく、何も考えないように。幸せで、今ある自分の立場を疑いもしないように。

だが、自分が初めて会った時と、この子はなんと違うのだろう。

なんて大人になったことか。

「君が、真実を見極める力を持っていて嬉しいよ」

「ありがとう。あたしもフジオミが優しくて嬉しいわ」

「優しい？　僕が？　そんなこと言われたのは何年ぶりだろうね。

懐かしい響きだよ」
「だって、博士の話してくれるフジオミはいつだって優しかったわ」
「シイナが？」
「ええ」
フジオミは苦笑した。
シイナが自分をよく話すのは当然だ。マナに話して聞かせる自分が、いつも彼女が言う傲慢で勝手な男であってはならないのだ。
脚色された自分は、マナの憧れと理想を兼ね備えた男として彼女の中にインプットされている。そして自分はその通りに振る舞う。
全てはマナのために。マナだけのために。
「博士は、きっとフジオミのことが好きなのよ。フジオミをとてもよくわかってる」
その言葉に、フジオミは浅く微笑った。無邪気なマナの考えを、浅はかだとは思えなかった。仕方のないことだ。猜疑や不信から遠ざけて、シイナは育ててきた。
「さあ、どうかな。よくわかっていることと愛することは、決して同じにはならないんだよ、マナ。彼女は、きっと僕より君のことをずっと好きだよ」
フジオミは立ち上がり、落ちてきた前髪を無造作にかきあげた。
「シイナは、君に自分を重ねているんだ。なれるはずだった自分を、君に見ている。彼女には、君こそが全てだ」
ガラスの向こうの見慣れぬ風景を、フジオミはただ見つめていた。
「――」
遠くまで来た。
シイナのいない、今まで自分の知ろうともしなかった世界へ。
思い起すのは何故か彼女のことだけだ。
自分が死んだと思っただろうか。そうならば、冷ややかな仮面の下で、きっと自分自身を責めている。
どんな人間よりも、シイナはフジオミにとってあざやかな色を持った、確かな存在に思えた。その冷酷さも、残酷さも、傲慢さも、

彼にとっては全てが深い感慨を呼び起こす。
「――フジオミも、博士のこと好きなのね」
　呟くマナの言葉を捕らえ、フジオミは我に返った。奇妙なものを見るようにマナを振り返る。
「マナ――？」
「そうよ。だから博士とあたしが仲良くするのいやなのよ。やきもち妬いてるんだわ」
　マナはむくれた顔つきでそっぽを向いた。
「――好きって、僕が、シイナをかい？」
「ええ」
「君は凄いことを思いつく子だね、マナ。一体、どうしてそんなこと考えたんだい？」
「わかるわ。あたし、何故かなんてわからないけど、でもわかる。フジオミは博士のことを好きなのよ」
　きっぱりと言い切るマナに、フジオミは唖然とした。論理も何もない、けれど物事の本質を見抜くことに長けた少女は、今、見事にフジオミの――自分自身考えることさえもしなかった――シイナに対する想いを、曝け出したのだ。
「それは――気づかなかったな」
　気抜けしたようなフジオミの声に、マナは本当にいやそうな顔をした。
「驚いた。フジオミは意外と鈍感なのね」
　その時、二人の背後にあるドアが開いた。ユウが顔を出す。
「マナ。お鍋、ふいてるよ」
「そうだ、ご飯の支度が途中だったのよ！　じゃあね、フジオミ、もうすぐお昼だからユウと後から食堂に来て」
　マナは急いでかけていく。
　後にはフジオミとユウが残る。
「食堂は階段を下りて廊下を左にまっすぐ行った突き当たりだ。すぐにわかる」

それだけを言うとユウはフジオミに背を向けた。ドアを閉めかけるユウに、
「君は僕が嫌いらしいね」
フジオミが言う。
「――」
振り返ったユウは不機嫌そうにフジオミを見返す。フジオミは肩を竦めて微笑った。
「顔に書いてあるよ。マナが好きだから近寄るなって」
ユウの顔がさっと赤らんだ。
「そんなこと、あんたに関係ないだろ!!」
笑いを、フジオミは押さえられなかった。感情を隠せない少年を、フジオミは少々からかってやりたくなった。悪い癖だ。これだからシイナにも煙たがられるのだと、フジオミは思った。
「君は自分のことをどれだけ知っている?」
ユウは答えない。
「――」
「君とマナが遺――」
「言うな!!」
ユウの叫びが、フジオミを遮る。その眼差しは、今にもフジオミを射殺してしまうくらいに鋭かった。
「そうか。知っていたのか」
本当に、悪い癖だ。フジオミは自嘲する。自分は彼の一番痛いところをついたのだ。
「――言わないよ、マナには」
さらりと、フジオミは言った。ユウは怪訝そうにフジオミを見つめている。感情を隠せないユウを、フジオミは好ましく思った。なぜかシイナに似ているとも、思った。
「言ったから、どうなるわけでもない。惹かれる心は止められない。君がそうであるように」
「――」

「僕と君が、逆の立場だったらよかったのに。そうすれば、お互いに、もっと自由に生きられた。僕は君が羨ましいよ。本当にね」

「あんた、何を――」

戸惑ったように声をかけるユウに、フジオミはあいまいな笑みを返した。

「さあ。マナのところに行くんだ。僕にとられたくなかったら、しっかりとマナを捕まえておくことだ。人の心だけは、努力ではどうにもならないから。僕はしばらくここで休んでいる。食事はいらない。行きなさい」

戸惑いながらも、ユウは言われた通り部屋を出た。フジオミは足音が遠ざかっていくのを確かめると、ゆっくりと窓辺へと向かった。古びた鍵を解き、窓を開け、彼のそれまで知らなかった異臭を風で追い払う。

薄汚れた灰色の瓦礫から身を乗り出す緑の群れ。高いものは建物の二階をすでに越えている。続く草原が風の方向を優しく示す。

「――なんて原始的な世界かね、ここは。とてもじゃないけれど、長居はしたくないな」

フジオミは周囲を見回して、もう一度眉根を寄せた。

マナは初めてここを見た時、とても美しいと思った。しかし、フジオミは違った。彼は、この風景に違和感以外の何をも感じることはできなかった。彼の知っている、美しいと思える自然の風景というのは、ドームの温室の中にしかない。

帰りたい。

今ほど強く、そう思うことはない。

全てが統制化されたあの銀色のドームへと、フジオミは今すぐにでも帰りたかった。

濃い緑は、彼の心を落ち着かせはしない。あるのは見慣れぬ違和感と強烈な色に対する不安、そして嫌悪だけだった。

彼は、人の力の及ばぬ世界の生み出す命の群れより、人の手が造り出した人工物を愛していた。

もしかしたら、自分達は、とっくの昔におかしくなっているのかもしれない。そう感じつつも、不可解とは思えなくなっている。

自然の恩恵を忘れて、一体幾世紀たったのだろう。美しさや懐かしさより違和感を感じるほどに、もうこの風景から自分達はかけ離れたものとなってしまったのだ。

「まいったな」

窓を閉め、鍵をかける。これ以上何も見たくなかった。ベッドに身を投げ出して、目を閉じる。

目眩のように、思考が駆け巡った。

忘れかけた苦い痛みさえも甦ってくる。

どう対処していいのかもわからない。

「――」

フジオミは途方にくれた。

だがそれも、無理はなかった。今まで一度も考えもしなかったことに彼は直面したのだ。

きっとこの世界で一番彼を嫌っているだろう女を、愛したという事実に。

「――まいったなあ。本当に」

意外にすんなりと、彼はその事実を受けとめていた。苦い痛みとともに。

嫌われていることは知っていた。だからこそ、ことあるごとに彼女の前に姿を見せた。彼女のきつい眼差しも、激しい言葉も、その全てが、彼を惹きつけて離さなかったからだ。

だが、愛されるための努力など、今更できそうもない。自分はすでに、完成されてしまった。もう変われない。死ぬまで、このまま生きていくしかない。

そして、シイナもだ。彼女も、もはや変われない。それしかない

のだ。
「――」
何もかもが、もう意味がないように、フジオミには思えた。生きることも、子供をつくることも、未来も、義務も、責任も、全てが色褪せていく。彼女以外の、全てが。
「シイナ……」
痛みしか呼び起こさない言葉を、フジオミは口にした。
今初めて、彼は自分が一人であることを思い知った。見知らぬ世界では彼を護るものは何もない。彼を知る人も、彼が親しんだものも、何も。
ただ一人であること、それはなんという孤独だろう。なんという苦しみなのだろう。
痛みしか伴わぬこの感情。彼は誰に教えられなくとも知っていた。

これが、愛だ。
ずっと昔から、彼女を愛していたのだ。

「――」
今更、気づくなんて。

フジオミの部屋を出て、ユウはそのまま外へと向かった。薄暗い廊下を足早に進んでいく。今は一人でいたかった。
フジオミの投げかけた言葉が、ユウの中で燻っている。
フジオミの言葉は、わかりやすそうでいてわからない。頭上から差し込む光を徐々に感じながら、そう思った。わかっていることは、自分が彼にはかなわないということだ。
「――ちくしょう」
彼は、自分とは全然違う大人の男だ。直感で、そう確信した。
知識や体格など、そんなものでは太刀打ちできないものが確かに

ある。

生きて重ねてきた年数には、どうあがいてもかなわない。

どんなに自分が歳を重ねても、相手はその分また歳を重ねる。

そして、その分その思考にも年輪を重ねていくのだ。

距離は決して縮まらない。それが、悔しかった。

「あいつが、マナの相手か」

風が不自然に騒めいた。彼の動揺を表すかのように。

「あいつを、選ぶのか。マナ――」

20

マナがわざわざ部屋まで運んだ朝食に、フジオミはほとんど口をつけなかった。
だが、マナはそんなに深刻には考えなかった。
初めてここに来た時の自分と照らしあわせ、フジオミも拒絶反応を起こしていると思ったのだ。
だから、無理には勧めなかった。
そんなことをしなくとも、何日かすれば思惑を無視して空腹が堪え切れなくなる。人間は二、三日食べなくとも死ぬことはない。
それよりも、マナはフジオミと話をしたかった。
老人亡き今、彼女の問いに答えてくれる大人はフジオミしかいない。
ユウは食事を終えると、いつもどおり姿を消した。きっと、地下へと行ったのだろう。
だから、老人が生きていた頃のように、マナはフジオミを外に連れ出し、散歩がてらに話を切りだした。シイナからでもなく、ディスクからでもない、新たな知識を得るために。
老人の言葉は、一つ残らずマナの中にある。
自分が何者であるか知ること。
そして、自分で決めること。
それを実現するためには、もっと知らねばならなかった。

「ねえ。フジオミ。あたし、ずっと考えていたのよ」

穏やかな風に吹かれて、フジオミは己れの思索に耽っていたが、マナの声に呼び戻される。

「マナ――？」

ドームから離れ、３日経った。

この廃墟群にも慣れ、ようやくフジオミはこの強い色彩に違和感だけではないおぼろげな美しさを感じるようになってきていた。

振り返ると、自分よりも立派にこの世界に順応している少女は、常にない真剣な目をしていた。

「もしあたしとあなたの子供が産まれても、結局人類は滅びるんじゃないのかしら」

フジオミが息をのむ。

「ねえ。そうでしょう、フジオミ？」

「マナ、言うな。それは考えてはいけないことだ」

「でも、考えずにはいられないわ。子供を産めるのは、もうあたししかいないわ。あたしとあなたの子供は、伴侶を迎えることもできずに、独りで老いていくのよ。それでも、必要なことなのかしら。博士は、一体どう考えているのかしら」

マナは知らなかった。フジオミとの子供が生まれた後、シイナが人工受精によって新たな生命をマナに産ませようとしていることまでは。

凍結保存された卵子と精子による人工受精卵をマナの体内で育てれば、マナとフジオミ以外の血を受け継いだ子供も作れるのだ。

だが、フジオミは、そこまでマナに話す気にはなれなかった。それは、あまりにも作為めいた苦々しい現実だった。

「――シイナは最期まで続いてほしいんだ。できうるところまで、我々人間の血が生き続けることを望んでいる」

「あなたも？　ねえ、あなたもそれを望んでいるの、フジオミ？」

「ああ。そうだ」

「それを疑問に思ったことはないの？」

一瞬だけ、フジオミは呼吸を止めた。

だが、無表情なその顔から、動揺が読み取られることはない。
「――」
感心したように、フジオミは穏やかに微笑んだ。
本当に、この少女はきわどいことばかり問い正してくる。まるでこちらの弱みを見透かすかのように。
そして自分は弱みを見せないように、さらなる嘘を繰り返すのだ。
「そんなことは一度もないよ。それが、僕等の使命だから。人間として生まれた限り、血を繋ぐことは義務だ。僕等は数少ない人間だ。最後の瞬間まで、人が生きてきた足跡を作らなければならない。それが、確かに僕等が存在していた証となるように。
自分だけが幸せであればいいなんて、それは間違っている。個人の幸せの前に、僕等はこの生の意味を、考えなければならない。そして、君と僕は次に血を残せる人間だ。生まれながらに責任がある。義務がある。それをなくしては何も考えられない」
シイナがことあるごとに言って聞かせた言葉を、そっくりそのままマナに繰り返す自分を、フジオミは滑稽な気分で認識した。

(偉そうに、何を言っているんだろう。そんなこと、微塵も考えていないくせに)

だが、永い営みの中で、一体誰が考えただろう。
人間が、こんなにも穏やかな滅びを迎えるなど。

フジオミ自身でさえ、今この現状にあっても、信じられないことだった。
もうすぐ、この地球上から、人間が一人もいなくなるなどとは。
そうして、今初めて、シイナの考えを理解する。
彼女は恐れているのだ――全てが無に帰することを。

それまで価値のあることが、突然意味を失くすこと。

それまで信じてきたことが、実は意味のないこと。

彼女はそれを恐れている。

だが、理解することとそれに共感することとは違う。自分は日に日に嘘を重ねることが苦しくなっている。

元来、フジオミは嘘などつかない性分だった。

自分の思うとおりに振舞い、それが許されていただけに、自身を偽る必要もなかったのだ。冗談なら言うが、それは全て自分の楽しみゆえだ。

しかし、今彼がマナに対して繰り返すそれは、決して彼が望んでいることでもなければ、彼を愉快にするものでもない。

だが、シイナの望みだ。彼女が望んでいることだ。そう自分に言い聞かせる。

マナは思った以上に人形から脱し始めている。その思想は危険だった。この社会の制度を、わずかに残った我々の存在理由を、根本から覆してしまう。

気づいた時から、フジオミはマナの思考の修正を謀った。ぶつけてくる問いに正論を繰り返し、反論を封じる。

ほんの少しずつだが、マナの考えが以前のように自分の方に感化されていくのを、フジオミは感じている。

マナはもともとシイナが人を疑うことのないように育ててきていたので、その効果も高かった。頭ごなしに否定するより、穏やかに根気よく説得する方が、考えを変えさせるには違和感がないのだ。

そんなふうにマナを〈教育〉していく自分を、フジオミは冷めた感情で認識していた。

自分は、一体何をしているのか。そう、自問したりもする。

自分のしていることは、己れの感情に反している。自分はシイナを愛している。マナではなく、シイナを。けれど、どうにもならないことも知っていた。

多分自分にも、その勇気がないのだ。カタオカがあきらめの言葉

を口にするその裏側で新しい命を望んでいるように、全てのしがらみを断ち切りたいと思いながら、そうしてしまうことをフジオミも恐れていた。

今までずっとそうであるように生きてきたのだ。

今更どうして変えられる。

変えたとしても、未来などない。

シイナは他人を愛せない女だ。憎んでいる相手を今更愛せるとも思わない。

そして自分も、未来を繋ぐことだけを最優先とするように教育されてきた。

シイナを愛していても、それには逆らえない。

（だが、わからないのか、シイナ――？）

すでに未来など、ないことが。

もはや意味など、ないことが。

予定された絶望。

考えればわかることだ。

すでに扉は閉ざされている。

それでも、人を、どんな形でも残したいのなら簡単だ。

クローンを、残せばいい。

人が死んでも、クローンなら残せる。寿命も短く、障害も多く出るだろうが、ただ存続させようとするのなら、最善の方法だ。

「だが、それではきっと、意味がないんだろうな――」

「――フジオミ？」

呼ばれて、フジオミは我に返った。
「どうしたの？」
「いや、何でもない。それよりマナ」
フジオミはマナに手を差し伸べる。
「帰ろう、ドームへ」
「――フジオミ」
「もう十分ここでは楽しんだろう？　シイナが心配しているよ。帰ろう」
差し伸べられた手をとろうとし、しかし、マナは思い出したようにそれをやめる。
「でも、ユウが。ユウを独りにしてはいけないわ」
「連れていけばいい。シイナは僕が説得するよ。君はユウを説得すればいい」
「ユウを連れて？」
それは、マナにとって意外な提案だった。
ユウとともにドームへ帰る。
考えたこともなかった。
だが、言われてみると一番いい考えのようにも思えた。
「――そんなこと、本当にできると思う？」
「シイナなら心配いらないさ。君と僕とで頼めばきっと聞いてくれる」
こともなげなフジオミに、マナは小さく呟く。
「本当に？　もしそれができたら、みんな幸せになれるのよね」
マナの言葉に、なぜかフジオミはやるせない気持ちをおぼえた。

幸せ。

幸福とは、一体何なのか。
何を基準に、誰を基準にそれを決定づけるのか。
無垢な少女を、フジオミは憐れに思った。

そして、彼女を欺き続ける自分も、憐れな人間であると、痛感した。

可哀相なマナ。

可哀相な自分。

可哀相な人間達。

何という愚かで憐れな生命体。

それでも、生き続けねばならないのか。

もうどこにも、救いすらないのに。

絶望と孤独とを携えて、滅びの瞬間まであがき続けねばならないのか。

なぜそれが、自分達でなければならないのだろう。

犯した過ちなら、それをしたものが携えていけばいい。それをしたものが足掻けばいい。

なぜ今、自分達が過去の人間のための贖罪を背負わねばならないのだ。

現状に溺れ、誰も未来を視ようとはしなかった結果が、これか。

答えの出ぬ問いを、それももうあきらめでしか、自分達は迎えられない。

怒りをおぼえるには、フジオミはたくさんのことをそうとは知らずにあきらめすぎてきたのだ。

「――じゃあ、ユウを説得するまでは待つよ。でも、あまり時間がないことも忘れないでくれ。君がいない間、シイナはとても心配していたんだから」

「ええ。ごめんなさい」

「シイナは君を娘のように思ってる。あまり心配させてはいけないよ」

フジオミの言葉に、不意にマナは思い出した。

「ねえ、フジオミ。あたしのお母さんって、どんな人？」

「え？」
「あたしにも、お母さんがいたんでしょう？　どんな人だったのか知りたかったの」
「――ごめん、よく知らないんだ。僕は君の母親とは違うドームで育ったから」
「じゃあ、ユウのお母さんはどうしたの？」
「死んだよ。事故らしい。僕にも詳しいことはわからないんだ。あっという間のことだったから」
「会ったことある？」
「ああ。きみに、そ――」
不自然に、フジオミは言葉を切った。
「そう――きみに、よく似ていた」
だが、マナはその不自然さには気づかなかった。
「じゃあ、みんな独りぼっちなのね。みんな淋しいんだわ」
「さあ、もう戻ろう」
「ええ」
フジオミに促され、マナは廃墟へと戻った。
ユウがそれを見ていたことには気づいていなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9709z/

ETERNAL　CHILDREN　～永遠の子供達～

2012年1月4日07時48分発行